

KULIC

12

1979.11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 12

目 次

三田の新図書館建設計画

- | | |
|----------------------------------|------|
| 1.....新図書館への期待 | 高鳥正夫 |
| 4.....設計者のねらい | 槇文彦 |
| 11.....新図書館のプランニング—準備段階から実施設計まで— | 中島紘一 |

トピックス

- | |
|-------------------------------|
| 20.....三田に実現したMARCデータのオンライン検索 |
| 34.....幼稚舎の“図書室を中心とする新しい学校施設” |

- | | |
|-----------------------|------|
| 22.....研究室における文献収集と管理 | 福川忠昭 |
|-----------------------|------|

- | | |
|--|---------------------|
| 26.....女性図書館員就業意識調査—1976・6～1978・5を省みて— | 池田久子／石黒敦子／並木和子／宮入暁子 |
|--|---------------------|

- | | |
|-----------------|-----|
| 29.....虚子文庫について | 本井英 |
|-----------------|-----|

- | | |
|----------------------------|-----|
| 30.....医学情報センターの学外サービスについて | 大澤充 |
|----------------------------|-----|

- | | |
|---------------------------------|------|
| 36.....三田文学ライブラリー—その生い立ちから今日まで— | 石川博道 |
|---------------------------------|------|

- | | |
|------------------------|------|
| 40....."Beilstein"について | 木下光博 |
|------------------------|------|

現状分析レポート

- | |
|--------------------|
| 43.....蔵書の年代別配架の背景 |
|--------------------|

- | | |
|-------------------------|----|
| 一日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の方向 | 関洋 |
|-------------------------|----|

* * * * *

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 19.....大学図書館・研究室・教室の一体化<ティールーム> | 江野沢一嘉 |
|---------------------------------|-------|

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 25.....米国西海岸の大学図書館を視察して<スタッフルーム> | 須田昭五郎 |
|----------------------------------|-------|

- | | |
|--------------------------|------|
| 39.....OCLCの半年間<スタッフルーム> | 渡部満彦 |
|--------------------------|------|

* * * * *

資 料

- | | |
|---------------------|------|
| 46.....三田情報センターの小展示 | 石川博道 |
|---------------------|------|

- | |
|-----------------------|
| 49.....年次統計要覧<昭和53年度> |
|-----------------------|

- | | |
|----------------------|------------------|
| 52.....編集後記 〈表紙〉 孫福弘 | 〈カット〉 日下部寿子・酒井明夫 |
|----------------------|------------------|

KULIC第12号 * 1979年11月1日発行 * 編集人 安西郁夫 * 発行人 高鳥正夫

* 発行所 慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室 〒108 東京都
港区三田2-15-45 * 電話 (453) 4511 (内線 3027~8) * 印刷所 梅沢印刷 *

三田の新図書館建設計画

新図書館への期待

高鳥正夫
(三田情報センター所長)

1. はじめに

義塾創立50年を記念して建設された三田の図書館も、建設後既にほぼ70年を経過し、その施設は大きさの点でも機能の点でも、現在の義塾における研究・教育の中核を占める施設としては不十分となってきた。そこで長期的展望のもとに、数年前から三田の新図書館の建設問題を検討する委員会が発足し、次第に具体化する方向にあったが、去る昭和54年7月には、新図書館建設のために要求される地域住民への公示が行われた。次いで9月には、新図書館の設計、管理を担当する横総合計画事務所において実施設計図の作成が完了した。そこで、12月には新図書館の敷地となる第二校舎をとり壊し、昭和55年3月から本格的な建設工事が開始されるところにきている。

この新図書館構想が具体化した過程、特に各種の委員会の活動状況、及び、今までに決まった新図書館の規模とその内容については、本誌においてもそれぞれ適切な担当者が執筆している。また、それらの点については他の機会に紹介したこともあるので、¹⁾ ここでは新図書館に期待する機能を中心に、新図書館の基本的構想とその実現の問題を述べてみたい。

1) 高鳥「新図書館の構想とその具体化」塾友

53年12月号、同「新図書館の規模とその内容」塾友54年9月号、高鳥・大山・高宮「新図書館の建設と大学図書館の役割」慶應義塾大学報104号

2. 新図書館に期待する機能

大学図書館として必要な近代的設備をもち、しかも相当大規模な新図書館が三田に建設された場合、情報センターは利用者にいかなるサービスを提供しようとするか、サービスはどのような方向で改善されていくかという問題について述べてみたい。現在、三田の図書館と研究室に所蔵されている図書は90万冊をこえ、継続中の雑誌のタイトルは5,700種、継続していない雑誌のタイトル数は6,500種をこえている。このような大量の図書、雑誌をかかえ、しかも、利用者が求める多種多様な学術情報の要求に応えるためには、内部的には図書館員の計画的な増員と資質の向上、図書資料の新しいグループ化、図書検索方法の検討と図書館業務の機械化、データバンクとの間の連絡用端末機の利用などを実現することが必要である。けれども、ここでは利用者の目にふれない点の問題は指摘にとどめ、新図書館の建設によって、利用者にいかなるサービスが提供されるかを具体的に述べることとする。

(1) 図書利用上の便宜の促進

大学図書館の最も基本的なサービスは、学生や教員その他の研究者が必要とする学術書を収集して備置き、必要とされる場合にこれを提供するサービスである。そのためには、選書に当つて教員の協力をうることが重要であるが、ある程度の量の学術書を備えた場合には、その蔵書の中から必

要とされる図書資料を容易に探し出すことができ、しかも、できるだけ簡易な手続で借出せるシステムを確立することが必要である。現在の図書館でも、既に新刊和書を中心に10万冊以上の図書を安全接架式の開架書庫に収容し、教員や大学院学生はもちろん、学部学生も自分で図書を手にして調べることができる方式を採用しているが、新図書館においても、その利用を一層便宜にするため書庫内にも閲覧席を設けて、簡単な調べものはそこでもできるようにしたい。図書の貸出手続、貸出冊数などについても、従来より便利にする方向で検討する予定である。

この安全接架式の書庫に備置かれる10万冊以上の図書が、学生諸君の閲覧希望の90%までを満たしているが、更にその収集内容などを検討することによって、この比率を高めていきたい。また、それ以外に、新しい学習用コレクションを新図書館の2階に設けたいと考えている。新図書館2階は主たる閲覧スペースになる場所であるが、ここに講義要綱などに掲載される教科書、参考書を必要なものは複数備え、開架書庫に行かなくとも手にすることができるようにならう。同様の意味から、必要な辞書字典類も備えたい。更に、従来の大学図書館の収集対象に入っていたような教養書、たとえば小説、時事問題の解説、文学賞を受けた作品なども備えて、学生諸君の読みたい本がここにもあるようにと計画している。

(2) 雑誌資料の利用の拡大

図書館利用者の最近の傾向を見ると、従来のように単行書を利用するほか、雑誌類、統計、白書類、法令、判例集などの利用が活発になってきている。このことは学問研究の動向、研究成果の発表方法にも関連するものであり、研究者はもちろん、学生も論文作成に当っては学術雑誌に掲載された業績を引用しながら、論文をまとめるところにきている。このことは三田に通学する学生が大学院学生と、3、4年を中心とする学部学生という構成によることもいうまでもない。また、教員

にあっても単行書を手許において研究することはできても、種類も分量も著しく増えてきた雑誌類を、常に手許において整理し利用することは困難であり、昨今の住宅事情も加わって、どうしても研究室、図書館の雑誌資料にたよることとなってきた。

そこで新図書館においては、3階と4階を雑誌資料のためのスペースにあて、従来、研究室、図書館に分れていた雑誌資料をここに集中し、人文、社会科学に関する内外の学術雑誌のセンターを作ることとした。この点は学部教員の深い理解と協力に負うものであるが、これによって学生諸君は、図書館雑誌室になかった雑誌資料についても、従来より容易に利用利用できることとなる。同時に、3階、4階には必要な閲覧席を確保し、複写機も十分に備置くことによって、雑誌資料を館外に持出さなくて済むようにすると共に、いつ出かけても必要な雑誌資料は利用できるようにしていきたい。こうした諸条件がみたされれば、この学術雑誌センターは塾における学問研究と教育に大きな貢献をなしうるものと期待している。

(3) レファレンス・サービスの充実

図書館の利用者が必要な図書や雑誌論文を探そうとする場合、目録をひいたり、主題に関する書誌や事典などの参考図書類を調べたりするわけであるが、こうした参考図書を集めておくレファレンス・コーナーは現在の図書館にも設けられている。けれども、現在では十分なスペースがとれないと、本来は書庫にあてるスペースを改造してレファレンス・コーナーを設けている実情である。将来の大学図書館においては参考図書類を豊富に備え、学生はもちろん研究者に対しても有益なレファレンス・サービスができるところにまで進める必要がある。図書や資料が次第に充実してきているわが国の大学図書館の間で、利用者に対するサービスに隔差が生ずるとすれば、その図書館のレファレンス・サービスが充実しているか否

かにかかわっているといつても過言ではない。

そこで新図書館においては、最もアクセスに便利な1階の大部分をこれにあて、各種の参考図書を豊富に備えると共に、レファレンス・カウンターを設けて図書館員を配置することとした。利用者が雑誌を利用する場合には、3階または4階の学術雑誌センターでもレファレンス・サービスを受けられるし、貴重書については5階の貴重書室でもサービスを受けられるが、単行書も含めて広くかつ深いサービスは、1階のレファレンス・カウンターで受けられるという体制を実現できるよう、情報センターは人材の養成に努めていることを明らかにしておきたい。

なお新図書館では、貸出手続を要する図書以外は、原則としてその階では自由に閲覧できるようにするため、図書館の入口に無断帶出防止装置（ブック・ディテクション・システム）を設けることとした。わが国でも一部の大学図書館で既に実用化されているが、塾の図書館では最初の試みであり、図書館の図書を無断で館外に持出そうとすると、入口でチャイムが鳴り、警告が発せられるという装置である。その反面、自分の本を持ちこんで閲覧席で勉強することも自由となり、カバン類をロッカーに入れる手数も少なくなるものである。

(4) 図書館利用教育の徹底

日吉の課程を終って三田の図書館を初めて利用しようとする学生にとって、まず三田の図書館ではどこに雑誌があり、単行書の貸出手続はどうなっているかなど、基本的なことは1日も早く理解して利用して欲しい。また、専攻科目についてある程度の理解をもつ学生は、更に広く資料を利用するにはどこから手をつけたらいいか、研究の手引としては何が有益であるかを知りたいことであろう。こうした希望をみたすために、館内施設の案内というような印刷物を受取って読んでみたり、受付の人やレファレンスその他の図書館員に尋ねたり、あるいは、先輩や教員に教わることも

あろう。図書館を利用する場合に、こうした手引が与えられたか否かによって、利用上の効率に大きな開きがでてくることはいうまでもない。

そこで新図書館では、地下一層のAVホールを利用して、学年初めには図書館利用のためのフィルムを上映し、新しく図書館を利用する学生に必要な手引を与えたい。また、研究者の協力をえて、法学、経済学など主題ごとに資料の利用法をフィルムに収め、ゼミの学生などに対して上映することも検討したい。また、図書館情報学科のスタッフの協力をえて、種々の角度から、図書館利用教育の徹底を進めたいと考えており、こうした教育とレファレンス・サービスの充実によって、図書館利用の成果は一層大きなものとなろう。

(5) 貴重書の保存と利用の体制の確立

塾の図書館には重要文化財に指定され、学術的にも貴重な善本、稀書類が数多く所蔵されている。これらの貴重書は、あるいは篤志家の寄附によるものであり、あるいは図書館が一貫した収集方針のもとに、長年にわたって収集してきたものである。現在の図書館では、貴重書の保存のため金庫室と貴重書の書庫を設けてはいるが、場所も狭く設備も十分とはいえない。図書館が先輩から受継いだ貴重書を保存し、これを学術研究の目的に役立て、また、その上に新しい収集を加えていくためには、優れた見識と経験を備えた図書館員が必要なことはいうまでもないが、同時に、近代的設備をもつ貴重書室が必要である。そこで新図書館では、特別の閲覧席と書庫からなる貴重書室を設け、最も貴重な図書資料と学術研究に必要なものを備置くこととした。図書館のもつ貴重書のすべてをここに収藏することはできないが、他にも必要な設備をもった書庫を用意して、貴重書の保存と利用に万全を期していきたい。

新図書館に期待されるこれらの諸機能が十分に発揮できるよう、三田情報センターは今後も一層の努力を続けたいと考えている。

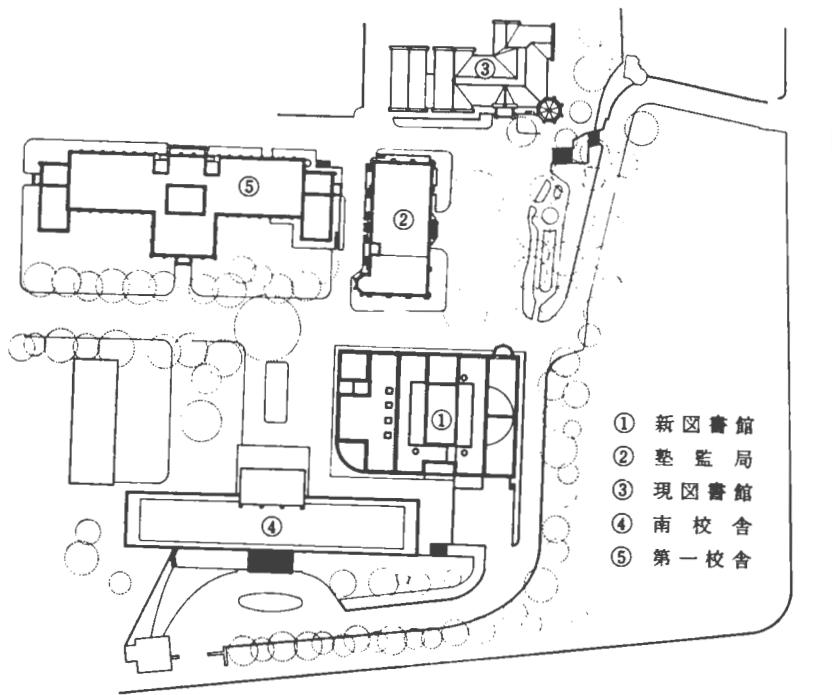
設計者のねらい

槇 文 彦
(槇総合計画事務所代表取締役)

1. 配置計画について

商業地のオフィスビルの場合、建物を敷地のどこに配置するかという迷いは殆どない。住宅地の場合でも昨今、敷地のどこにしようか等という賛沢は殆ど許されないといってよい。今回、三田の丘に新図書館を建設するに当って、どこにたてるかについて当初いくつかの候補地があった。最終的に残ったもう一つの敷地は現伊太利大使館に近い、現図書館の裏手に続くところである。つまり

保健管理センター・食堂等を一部壊してたてるという案であった。この敷地は現図書館に近接してつくられるという利点があり、図書館独自の総合的利用という見地からみれば大変魅力のあるものであった。しかしこの敷地は伊太利大使館や直ぐ道路を超えて向う側にある隣地に対する影響が多い。近年隣地、特に建造物の敷地北側に対する日照規制が強くなり、分析の結果、この敷地はそうした理由から適当でないことが判明した。最終的に決定された第二校舎が占めるところは、たしかに現図書館（新図書館建設後も新図書館と共に図書館機能の一部をそのまま補完する。）とは少し離れていて不便である。しかし、恐らく現図書館からあまり離れていない距離内あとに残された唯一の適地であること、キャンパス外の隣地への日照の影響が極めて少いこと、そしてこの位置は南校舎の正面玄関からのアクセス、及び三田正門からのアクセスがともによいこと、現在の第二校



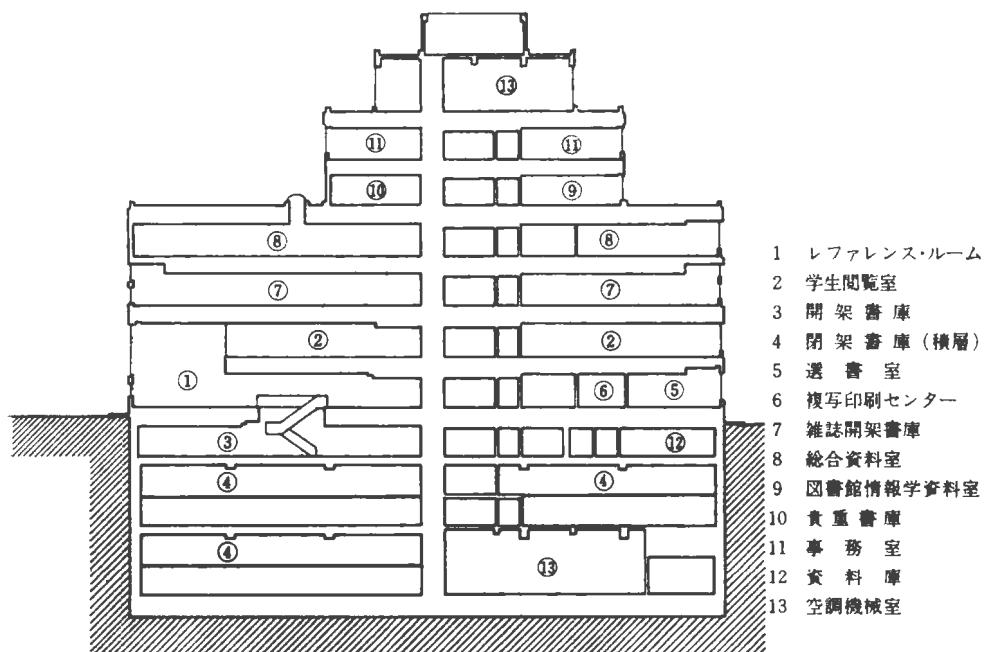
建 物 配 置 図

舎は戦後直ぐに建てられた故谷口吉郎先生の作品の一つであるが、木造で可成老朽化していること等々の理由によって、慎重に検討された結果、もっとも適当であると判断された。但し三田の山は既に多くの建物がたてられているので、今回要求される各諸機能を充す為には可成大きな建築総床面積（最終的には約15,300m²）が必然的に齎らすウォリウムをうまく配置することは決して容易な作業ではなかった。そして何ヶ月にも亘るスタディの結果、図に示されるような位置に決定された訳である。周辺の建物のウォリウムとの釣合い上、又キャンパスに充分な外部空間を残し、環境上最小の隣棟間隔を本部棟、南校舎との間に確保する為には、いたづらに建物の各階（特に低層階）の床面積を増大する事は許されなかった。又だからといって建物を高くすることは先に述べたように隣地に対する日照規制が許さない。その結果多層図書館になることは当初より予想された

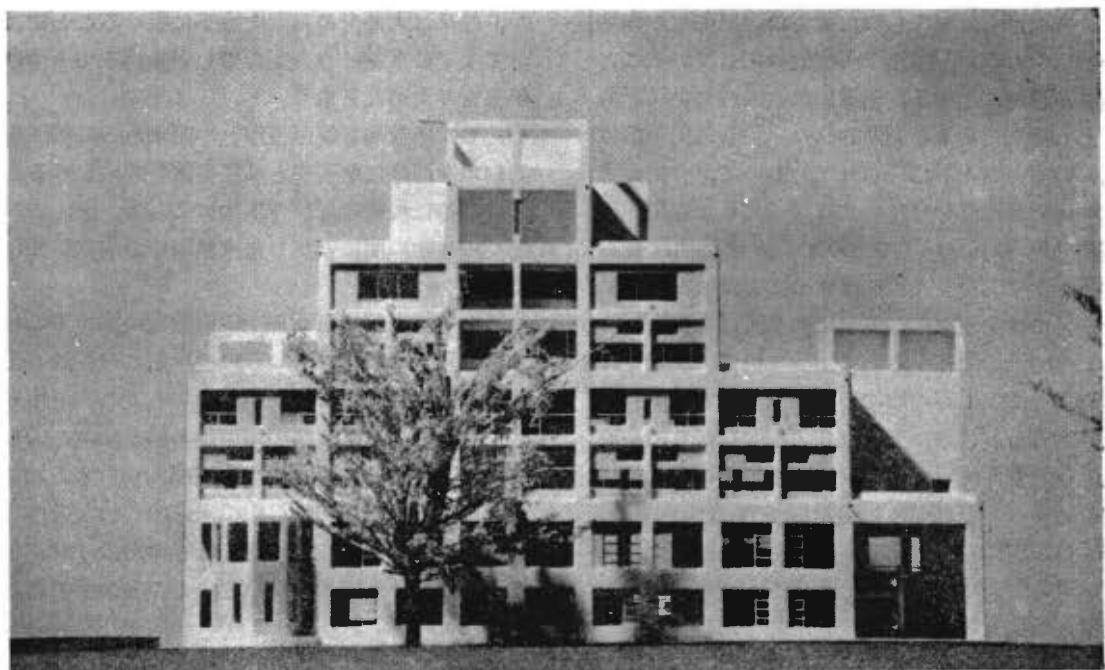
が、結果は大部分の書架を地下に設けることによって上記のウォリウム上の厳しい条件下で一つの解答を与えた得たと思う。

そして塾監局と現図書館との間にある隣接間隔約14mを同様に塾監局と新図書館の間に設けることで、特に現塾監局前の広場にたったとき、この三つの建物の間に安定した位置関係が成立している。

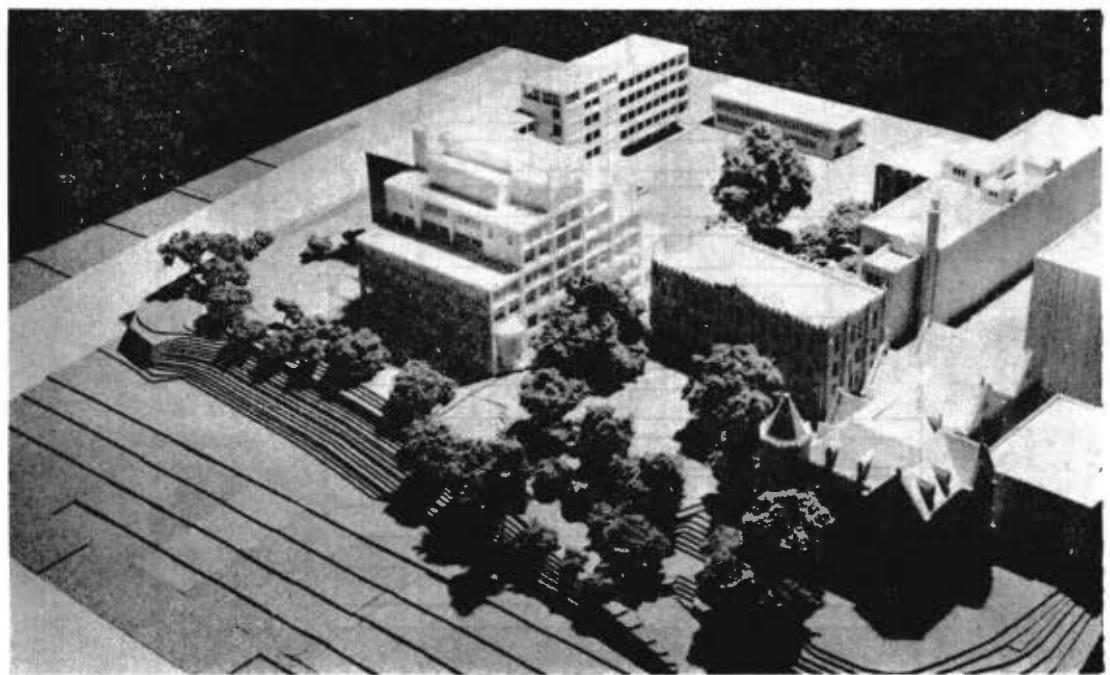
この新図書館の東西線上の位置を決定することは更に難しかった。というのは東西に残される土地の取合いにならざるを得ないからである。結果的には現在キャンパスの南口から塾監局前の広場にいたるアクセス道路を幾分東側にずらすことによって、この三田の山の中で一番中心的な広場である南校舎と第一校舎の間の広場をあまり削減することなく、新図書館をおさめることができたと思う。



機能配置図



北側（墊監局側）からみた模型図



俯瞰図

2. プランニング上の問題：特に多層図書館について

既に述べたようにこの新図書館は多層図書館である。近年、世界各国で建設される図書館は次第に多層図書館になりつつある。特に日本に較べて遙かに敷地に余裕のある米国においても、市街地の場合高層図書館が増えつつある。低層図書館は管理者側の方から言えば水平的な連絡で済し得る部分が多いので望ましい。それに対して高層図書館の場合、各層にいれられる諸機能の全体的関係が各階の中におさめられた部分同志の機能関係と同等に、又それ以上重要になる。と同時に将来における予測しえざる（或いは予測され得る）機能関係、規模の伸縮に対して、くみかえのフレキシビリティも確保しておかなければならない。

この為に権事務所はこの新図書館の位置がほぼ決定した去年の秋より情報センターを中心とするメンバーと密接な協同作業のもとに、いくつかの代案の比較検討を重ねたのである。当初より大半の書架を地下に設けること、キャンパスの出入に近いところに学生の為のチェネラル・リーディングルーム、図書館の中心的サービス機能である目録、リファレンス、コピーイングの諸施設、上層階に研究、管理機能をもってくることについては、大凡その決定をみていたが、そうした大枠の中で無数のヴァリエーションが可能であったので、それを3つ位の典型にしほっていく作業が精力的に続けられた。

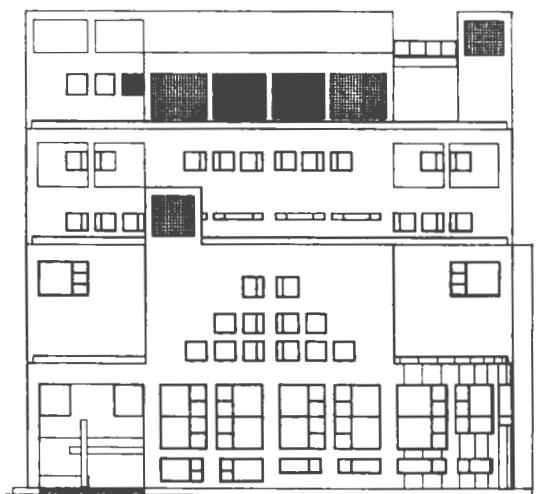
しかしこの作業のプロセスにおいて、我々の与えられた条件は敷地の余裕が許さない為に可成厳しいものの、充分、大学図書館の要求に応え得る多層図書館を設計し得る確信を得たのである。多層図書館においては、当然各階の連絡はエレベーターに依存することになる。エレベーターは学生、教員、一般訪問者用のものと管理者専用エレベーターの二つに分れる。更に専用エレベーターの一部は地下書架利用者が兼ねることになる。そこには図書館のチェック機能が確保される為に細心の考慮が必要であった。又多層図書館は低

層図書館に較べて連絡機能の不便さがあるのは当然であるが、その代り、各階において四方に充分な採光部分をとり得るメリットがある。特に今日のように省エネルギーが叫ばれる時代は、窓、トップライト等からの自然採光が多く、中間期には窓の開閉が自由に行えることがより望ましい。その上、窓々から美しい広場の樹木や建物のシルエットを楽しんだり、遠く東京湾や下町の遠望も享受し得る等、多層図書館のもつメリットも充分にあるのである。

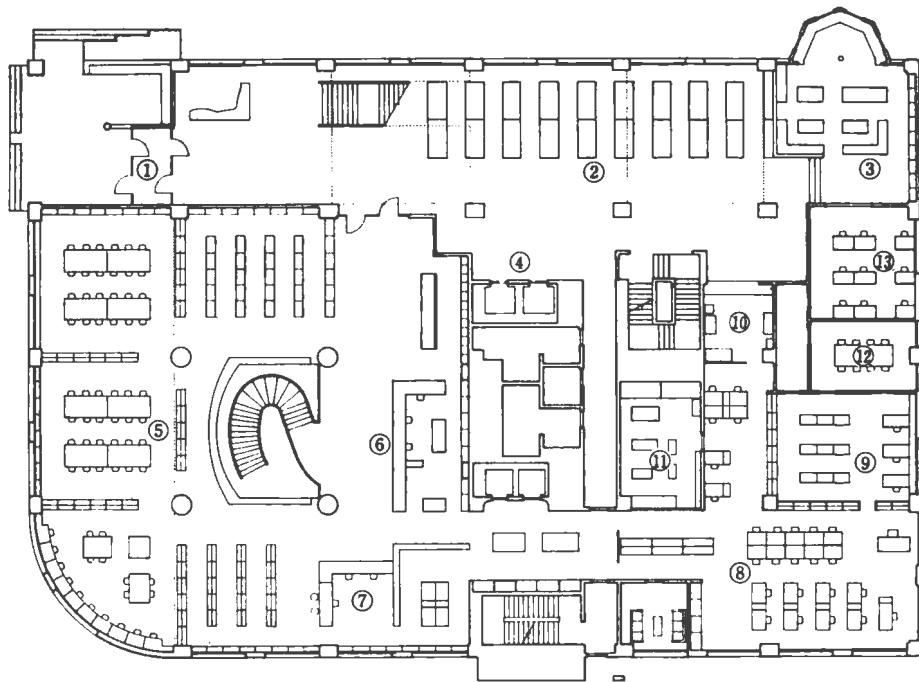
3. プランの最終決定まで

去年の11月頃から今年の2月の中端まで、先に述べた権事務所と情報センターを中心としてつくれたいいくつかの暫定案が、各学部の教授陣を含み藤沢理事が司る新図書館建設小委員会（仮称）によって、何回かの極めて活発、且つ真剣な討議により検討され、その結果大凡最終案には近いものがつくりあげられた。今、その討議のプロセスにおいて、最も重要な変更、改善と思われるものを挙げると次の通りである。

西立面図

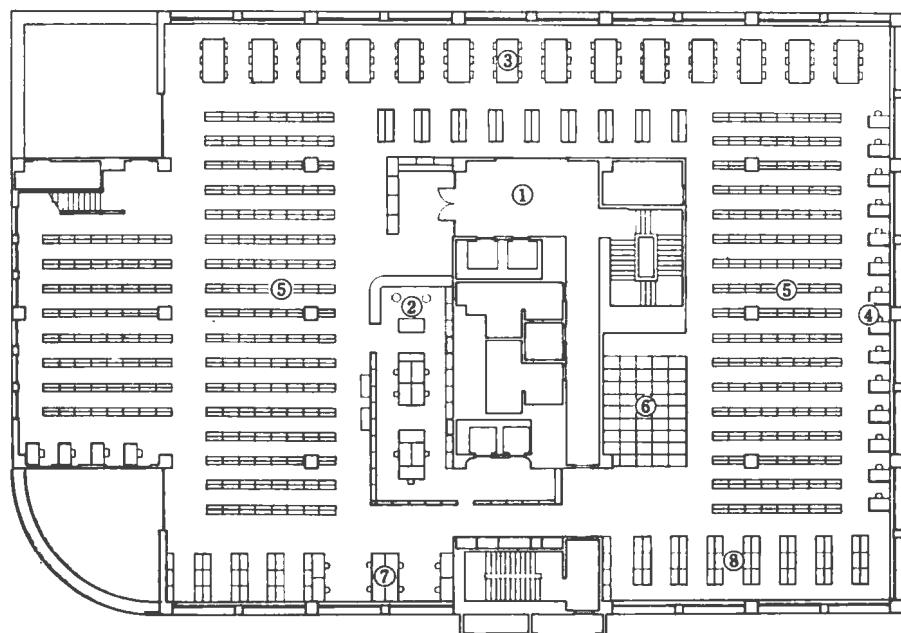


- ① エントランス
 ② 日録ホール
 ③ 新聞閲覧ホール
 ④ エレベーターホール
 ⑤ レファレンスルーム
 ⑥ 出納カウンター
 ⑦ レファレンス事務室
 ⑧ 複写機械室
 ⑨ 選書室
 ⑩ 会議室
 ⑪ 特別閲覧室
 ⑫ 印刷センター
 ⑬ 複写・印刷センター



1階平面図

- ① エレベーターホール
 ② 事務室
 ③ 閲覧室
 ④ キャセル
 ⑤ 雑誌開架書庫
 ⑥ 集密書架
 ⑦ マイクロ映読室
 ⑧ 新聞架



3階平面図

3-1 主出入口の位置

最初の権事務所の提案は主出入口を建物の北・東隅に設けることにより、現図書館との便を確保し、同時に塾監局と二つの図書館の間の広場が、この三田の丘の最も象徴的な外部空間であることの意志表示を行うことができるよう意図したものだった。しかし委員側より、現在学生の大部分は南校舎教室棟をくぐってキャンパスに到ること、又、研究棟からのアクセスを考えると、寧ろ建物の北西隅を主出入口にすることがより適当ではないかという意見が提出され、慎重に考慮の結果、そのように決定された。

3-2 1, 2階床面積の増大

既に述べたように、比較的狭隘なキャンパスの中で充分な外部空間をのこす為に、当初のプランでは東西への建物の奥行きは40mであった。しかも最も利用度の高い低層階に充分なスペースを与える為に、更に東西方向に8m奥行を増やすことが提示され採用された。この結果、現福沢記念公園の一部が削られ、西側の広場の銀杏の樹が何本か移植せざるを得なくなるが、内部諸室の配置は飛躍的に改善された。

3-3 図書館機能の配置上の問題

当初情報センターの希望として、出来得る限り多層図書館における管理運営を適正最小限のスタ

建築概要

建築面積	1,623m ²
延床面積	15,283m ²
図書収容能力	115万冊（予定）
利用席数合計	1,100席（予定）
構	造：鉄骨鉄筋コンクリート
階	数：地下5階・地上7階・塔屋1階
設	備：全館冷暖房
竣	工：昭和56年10月（予定）

ップで最も効果的に行う為に、レファレンス、目録、図書貸出、選書、整理等をなるべく集中管理する事が考えられた。その結果、目録レファレンス、貸出し事務の外、選書、整理事務機能も2階に設けられ、学生のゼネラルリーティング・ルーム及び教員、大学院を中心とする研究図書館の施設がその上層階を占める案が提出された。しかし図書館の本来の利用者である学生・教員の便を第一義的に考えることによって、整理部門は本部機能と共に最上層階である6階に集約され、学生用の一般リーディング・スペースが2階にその大半が設けられることになった。この案のもう一つの利点は殆どの一般学生が地下1階の開架書庫、レファレンス、目録、読書室等をエレベータを利用すること無しに利用し得ることであり、更に、当初のプログラムより規模が拡大された研究図書機能、雑誌図書が夫々3、4階に開架書庫をもち乍ら、独立した階としてまとめられたことである。

3-4 書架の増大

当初、15年先を目標として充分な書架スペースを設ける為に地下4階（1層積層書架を含む）が提案してきた。しかし計画の最終段階でこの程度の書架では直ちに一杯になること、少し予算を増やすことが、相當に書架のキャパシティを増大しうることなどが提案され、現案通り、地下5階（2層積層書架）に拡大された。

4. 新図書館の意匠について

周知の如く、建築には以上のべた機能上の要求の外に様々な美的、心理的効果を満足させるという重要な課題が残されている。建物は単に四角い箱であればよいのではなく、又部屋は与えられた大きさと、他室との動線関係が確保されればよいというものでもない。この美的心理的効果を目的とする設計上の解決を広義の意匠とよぶこととし、外観・内部空間の二つにわけてその特徴をしるしてみたい。

4-1 新図書館の外観について

現図書館は70年前、当時の曾根・中条事務所によって建てられたチューダー・ゴシックの様式の名建築である。

しかし、南に隣接する南校舎は近代機能主義的建築である。又中央広場を介して西側には故谷口吉郎先生の戦後の名建築がある。このように三田の山には様々な建物が、夫々の建てられた時代を反映して息づいているといってよい。新図書館を様式的にどういうかはわからないが、独自のシリエットと細部意匠（特に窓廻り）をもった建物である事だけは事実である。オフィス・ビルでは各階の機能がどちらかというと平均化されやすいので、その表現も均質である場合が多い。超高層ビルはその一つの典型といってよい。この図書館は二層ごとに上にいく程階段状にセットバックしている。その理由は特に西側中央広場に建物が蔽いかぶさってくるような印象をさけると同時に、特に北側広場からみた時に、ある安定した像を印象づける為である。窓まわりは1、2階は開口も大きいが、それを仕切る外壁スケールも大きい。そして上部にいく程、窓まわりは小さなスケールを出していく。その結果全体として、下の方にいくに従って安定感の強い表情になっている。その部分だけをとればゴシックのスピリットを反映しているといえるだろうか。

又、外壁の材料は煉瓦タイルである。色は今のところ未定であるが、地下5層とはいえ、地上に出ている部分も可成マッシヴな建物なので、あまりヴォリュームを強調するような濃色にしない方がよいのではないかと思っている。

4-2 内部空間構成について

このように象徴性も重要な建物では内部の空間、特に1、2階のパブリック・スペースはそうした象徴性を表現していくところとしてよく使われる。現図書館の正面玄関の2階へのアプローチもその一例であろう。新図書館の階高は4mである。この為2層で8mの階高になるが、柱間の8

mとの二つによってほぼ立体に近い箱のつみ重ねの様な寸法関係になっている。それが最も端的に表現されているのがメイン・エントランスを含む西北隅でここは外部の屋根つきテラス部分として、ベンチも設け、一寸した学生の憩いの場を提供することになる。

中に入るとこの北側の柱間に沿って、二階のチャネル・リーディングスペースへの階段がある、と同時に目録コーナーが設けられ、その北端は一寸床が上っていて、新聞閲覧の為のゆっくりした読書コーナーがしつらえている。この部分は建物の壁面線より半円筒型に北に向って少しスペースが突出している。この突出しは現図書館・塾監局棟の玄関の突出しに対応するもので、ここから正面広場の景観がエンジョイしうるであろう。

又エントランスを入れるとすぐ右側は、レファレンスを含み、西に向って一部吹抜けの空間があり、この北側のコリドールに沿って設けられた吹抜け空間とともに、1、2階の空間としての一体性、象徴性を演出している。特に塾監局側の銀杏、西側の中央広場の大銀杏は、大きな開口から常に本を読む人々の視野に入ってくるように計算されている。こうした吹抜け空間の外に、各階に適宜に休憩用の小コーナー等が設けられている。

＜新図書館計画作業行程表＞

* 実施設計	昭和54年9月中旬完了
* 学内承認	昭和55年1月の理事会・評議員会の承認手続き
* 事前公開	昭和54年7月1日 標識設置
* 許可申請	昭和54年8月1日 日影に係る既存不適格建築物……許可申請
* 確認申請	昭和54年11月初旬
* 準備工事	昭和54年12月初旬 第二校舎の解体・撤去
* 本工事	昭和55年3月着工 (入学試験期間中は工事中断) 昭和56年10月末完工予定

新図書館のプランニング

準備段階から実施設計まで

中島 純一

(情セ本部事務室長代理)

1. はじめに

以下では、昭和51年11月にスタートし、54年9月に実施設計を完了した新図書館計画について、ほぼ3年に及んだプランニングの経過を重点的に記述する。

三田に新図書館を建設しようという動きは20年前の昭和34年に溯る。この時は委員会も組織されて、一応の成案を得るに至っている。しかし計画はその後糸余曲折し、最終的には昭和45年の研究室棟の建設時、その約3分の1を書庫施設とすることによって当面の結論を得た形となっている。この時点では、建設を期待された総合図書館は、将来研究室棟を北側に拡張する（いわゆるL字型計画）時に、その中心施設として位置づけられ、その時まで建設が延期されたものと理解される。

この間、研究室書庫の増設によって全体の収容能力に多少の余裕は生じたが、昭和51年の半ばにはそれも先が見え始めていた。図書館では収容力の限界である60万冊に急速に迫りつつあったし、研究室書庫の方はあと数年で満杯になるところに近づいていた。また図書館の学生閲覧席は、談話室のベンチを含めてもようやく590席に達するという有様だった。一万人近い専門課程の学生を抱えるキャンパスの図書館としてはその老朽化もさることながら基本的な施設・設備の面で、今の図書館はもはや到底機能し得ない状態にあるのは誰の目にも明らかだった。このような事情を背景として、情報センターにはL字型構想の早期実現を望む声が高まってきた。

諸般の事情から、最終的にまとめたプランはL字型構想の実現ではなく、それに優るとも劣ら

ない独立棟の総合図書館の建設であるが、そこに辿りつく道程は、思わぬ出来事の発生や予期せぬ事態への展開など、情報センター関係者を喜ばせたり、ハラハラさせたりする場面の連続であったといっても過言ではない。

一口に新図書館の計画といっても規模や環境によってその内容には大きな差異がある。三田の山には、専門課程の学生一万人、大学院学生600人、教員・研究者が300人以上おり、図書館には60万冊、研究室には30万冊の図書があって、このキャンパスは義塾の人文・社会科学の研究・教育の中心的機能を果たしている。これをさらに飛躍・発展させるための図書館を作るとなれば、それは当然かなり大きな規模にならざるを得ない。三田の新図書館計画は、まぎれもなく義塾の大型プロジェクトの一つといえるのである。

2. 建設要望書の提出

新図書館計画は、昭和51年11月5日、情報センター所長と文・経・法・商の4学部長とが連名で久野塾長（当時）に「新図書館・研究室棟の建設について」と題する要望書を提出したことが発端となって、具体的な動きが始まった。この要望は、前述したL字型構想の早急な実現を迫ったもので、情報センターは図書館を中心とする施設を、4学部は個室・共同研究室などの研究施設の拡張をそれぞれ意図し、両者ともども異なった思惑を持ちながら、建物の建設という共通の目標に向かって協同歩調をとったものだった。

情報センターではこれより先、逼迫する書庫事情を前にして、今後の運営をどう進めるかについて組織ぐるみの検討が真剣に続けられていた。昭和51年7月7日、部課長級職員7名（所長含む）が集まり、当面する問題と将来の展望とを継続的かつ組織的に検討するため政策会議（後にメンバーを拡大して政策運営研究会と改称）¹⁾を設置することを決めた。この時情報センターは昭和45年の発足から6年が経過していたので、書庫の問題をも含めてこの間のほころびを繕う必要があり、

また次の飛躍のためには現状の不備を徹底的に分析する必要があった。

この会議は、新図書館計画を前途に睨んだセンター内部における最初の動きであり、この会議を通じて、情報センターの次の発展は新図書館の建設がなければ考えられること、新図書館の建設は、現在のオペレーティング・パターンをそのまま新しい施設に移すだけのものであってはならないこと、などの基本的な考え方が確認された。

業務の問題点の洗い出しとその解決策とを継続的に模索する一方で、新図書館建設計画を義塾の政策にのせるタイミングを睨んでいた高鳥所長は、頃合いを見ていよいよ行動を開始し、理事者や学部長などとの折衝を精力的に繰り返した。

その結果、政策会議での検討を背景にした、情報センターの手になる前述要望書が4学部長のコンセンサスを得てまとめられ、新図書館計画の第一歩がスタートしたのである。

3. 委員会の発足

新図書館・研究室棟の建設の要望を受けた久野塾長はこれに応え、阪埜光男学務担当理事（当時）を委員長とする「新図書館・研究室棟（三田）建設調査委員会²⁾」を発足させた。L字型計画の実現を前提として組織されたこの委員会は、敷地を研究室の北側とした場合、そこにどれだけの大きさの建物が建てられるかを調査し、どの程度の図書館施設や研究施設を収容できるかを検討することによって、最終的に必要な建物の規模を算定することを目的としていた。

この時久野塾長は任期をあと6ヶ月残すばかりだったので、調査委員会はこの期間内で必要な調査を実施して答申をまとめるよう要請された。このため委員会は、昭和52年1月21日の第1回から同年5月19日の第5回（最終回）まで毎月1回のペースで開催され、予定通り5月には答申がまとまって、退任間際の久野塾長に提出された。³⁾

論議の過程でいつも問題になったのは、予定される敷地にある山食、通信教育部、保健管理セン

ターなどの建物の移転の可能性や、北側民家やマンション住民に対する日照権交渉の展望などであった。これらの問題点は建物の規模の大小に直接かかわるものであるだけに、そこを不透明にしたままの規模の算定にはいつも不安がつきまとったのは事実である。論議のウエイトが、実行可能なプランの作成よりも、可能性の追求に置かれるくらいがあったのはそのためといえる。

答申では、予定の敷地に5,000坪程度の建物を建設し、そこに図書の収容能力100万冊、閲覧席1,000席を有する情報センターの施設と文・経・法・商の4学部並びに大学院研究科が必要とする共同利用施設とを収容するよう提言し、建物を遅くとも昭和56年3月までに建設するよう求めた。

この答申の背景には、新築部分には情報センターの施設をまとめること、収容する研究施設は共同利用施設に限ること、などの基本的な考え方があった。新築部分全体を共同利用施設にしようとするコンセンサスが生まれたのである。

この委員会の答申は最終的には実ることなく終ったが、新図書館の建設に向けてのレールを敷くことができた点や図書館施設をひとつにまとめるという発想が定着したことなどの点で、その後の展開に大きな意味をもつものであった。

情報センターでは、この委員会の発足に先立って5名⁴⁾のプランニングチームを組織した。施設部と協力しながら計画の立案にあたったこのチームは、メンバーに所長と副所長とを含んでいたため、センター内における事実上の最高意思決定機関として、向こう3年間計画遂行の中心的役割を果たした。

昭和52年の5月には塾長の交代があり、委員会の答申は久野塾長から、代わって登場した石川塾長に引き継がれた。答申をまとめた委員会のメンバーとして建物建設の必要性を熟知していた石川塾長は、この計画の推進を確約し、昭和52年10月7日、これまでの委員会を継承する形で福岡正夫学務担当理事を委員長とする「第Ⅱ期新図書館・研究室棟（三田）建設調査委員会⁵⁾」を招集した。

答申から5ヶ月を経て再開されたこの委員会は、計画の実行責任を負う理事者によってリードされたためなのか、その論議はきわめて現実的で実行の可能性を重視しようとする傾向を示した。前の答申の前提となった敷地について、既存の建物の移転が容易でないことを認識し、それに代る敷地の検討をすることになったのはその現れといえる。また答申にあるような図書館・研究室を含む複合的な建物を建てるのではなく、独立の図書館棟を建てる可能性も理事者側のイニシアチブによって浮上してきた。

これは答申のL字型案に対するオルターナティブとして独立の図書館棟を研究し両者の優劣を比較しようとするものだったが、この頃には、理事者側の意図が、恐らくは規模の関係から、新図書館・研究室棟の建設にあるのではなく、新図書館棟の建設にあることが明白となっていた。

こうして第II期の委員会は、独立の図書館棟を建てる方向に一歩づつ傾斜して行き、論議の大半はそのための敷地の選定に費された。

敷地を選定する過程では、施設部・情報センターが共同で提案した5,700坪の建物を前提として3つの案が登場した。その1は第3校舎をとりこわしてその跡地を利用する案(A)、その2は第2校舎をとりこわしてその跡地を利用する案(B)、そしてその3は塾監局前の緑地を利用する案(C)、の3つである。委員会の大勢はB案に傾いたが、C案を強く主張する意見もあって、結論はなかなかまとまらなかった。

論議の中心が新図書館の建設に集まるにつれ、研究室の影が次第にうすくなっていた。このことを懸念する意見に対して理事者側は、新図書館ができれば情報センターが使用している研究室部分が空くので、先のことはともかくも当面はそこを使用できる、と説いて理解を求めた。委員会の場ではこの説明によって研究室側は納得したかに見えた。しかし実はそうではなかったことを後になって痛いほど知ることになる。

敷地についての議論もほぼ出つくしたと思われ

る昭和52年12月16日の第3回目の委員会において、理事者側は、新図書館の敷地・規模について実行可能で責任ある回答をまとめる時間を得たいので、この委員会を当分の間休会にしたい、との提案を行ってきた。

この提案は了承され、委員会は休会に入った。再開されたのは翌53年6月15日だったので、休会はちょうど6ヶ月に及んだことになる。

情報センターではこの期間中、理事者側の求めに応じて、理想的な図書館計画をまとめるに全力を注いだ。⁶⁾ ポイントをL字型案と独立棟B案の2つにしぶり、どちらが採用されてもいいように施設部と共同で懸命の作業を続けた。その結果は「新図書館計画の概要」と題する文書となって結実し、これを53年2月14日建設計画の責任者として新たに登場した森為司理事に提出した。

この当時、情報センターが最も関心を払った事柄は敷地問題の帰趨だった。2つの案にはそれぞれ長所・短所があったが、総合点では日照権次第で規模がどこまで減るかわからないL字型よりは、その点に心配のないB案の方がよかつた。しかし間もなく、この問題に一挙に決着をつける新しい事態の展開があった。いわゆる日影規制の登場である。

日影規制は、建物を、それが隣地に落とす日影の時間によって規制しようとするもので、慶應周辺の地域に指定された規制値によると、イタリア大使館の敷地に影を落とすL字型は、事実上建設が不可能ということになったのである。

こうしてL字型はあっけなく姿を消した。残ったのはB案と、情報センターでは本腰を入れて研究したことのないC案の2つであったが、そのC案も後の調査によって2,500坪程度の建物しか建てられないことが判明し、候補地から外された。

休会中の委員会が再開されたのは、以上の経過を踏まえた後である。再会された委員会において、理事者側の回答が森理事から発表され、新図書館の敷地はB案を第一候補地とすることが正式に確認された。これと同時に理事者側は設計者を

早急に選ぶことを約束し、具体的なプランの作成は理事者、設計者、情報センターの三者で進めることが了解をとりつけた。この結論をもって、第Ⅱ期の調査委員会はその活動に終止符を打ったのである。それから間もなくして、新図書館の設計者は榎文彦氏であることが発表された。

4. プログラムの作成

昭和53年の2月、高鳥所長から森理事を通じて理事者側に提出した前述の「新図書館計画の概要」の中で、情報センターは新設する図書館の規模を5,000坪程度とするよう提案していた。この考え方の基礎は、現図書館と研究室書庫棟とにおいて営まれている機能を全部新図書館に一本化し、現図書館も研究室書庫棟も生きたサービスの場としては以後は使用しないという原則にあった。

委員会の席上で明らかにされた、これに対する理事者側の回答は、新図書館の規模は2,500坪以上とし、具体的には設計者の意見やキャンパスの景観とのバランスなどを考慮しながら決定するという含みの多いものだった。また、併せて現図書館をそのまま使用することと研究室からは原則として全部の機能が立ち退くことを求められた。

回答の内容は、情報センターの期待からはやや外れるものであり、とりわけ2つの図書館の併用という路線は、今後の運営の難かしさを予想させたが、併用もある意味では現実的であり、計画はまた一步前進したことは事実だったので、事態の推移は情報センター側関係者を力づけた。

設計者との最初の打ち合わせの日となった昭和53年7月6日以降、情報センターは設計者に呈示するためのプログラムの作成に着手した。森理事がこの時初めて明らかにした具体的な図書館の規模は9,000~12,000m² (2,700~3,600坪) だったので、この枠内で作るべき図書館について、本格的な取り組みを開始したわけである。とはいって仕事はゼロから始めたわけではなかった。

第Ⅰ・Ⅱ期の委員会を経たこの段階では、情報センターには施設部との共同作業を通じて蓄積さ

れた多くのノウハウがあった。プログラムを作成するには、このノウハウを規模に合うように編集すればよかったのである。

情報センターが作成したプログラムは、図書館を構成する、1) 閲覧・利用機能、2) 書庫機能、3) 事務機能、4) 共通部分、の4つのうち、1) ~ 3) までについて具体的な施設名を挙げ、その各々について収容人数または冊数、必要面積、面積算定の基準、使用時間などを記述したものである。以下にその内容の一部を簡単に紹介する。

1) 閲覧・利用機能

三田の全学生の何パーセントを収容するかを決めるのがここでのポイントである。基準として考えられるのは、「大学設置基準」による5%，文部省の「大学図書館施設計画要項」による20%，「私立大学図書館改善要項」による10%などだが、ここでは規模の制約を考えて10%を採用し、900席（全学生を9,000名として）を作るものとした。一席当たりの面積は内外の基準を参考に検討し、最終的には2m²という数値を用いた。

2) 書庫機能

書庫を考える場合のポイントは、最大収容冊数を何冊とみるかという点にある。図書の廃棄が簡単にはできない文科系にあっては、書庫の寿命は即ち図書館の寿命ともいえるので、寿命を延ばすためには収容能力は大きくなければならないし、むしろ大きければ大きい程よいともいえる。しかし、規模の上限が決められている図書館のプランニングでは、書庫に割り当てる事のできる面積は、結局書庫以外のどうしても必要な施設に割り当てた後の残りとならざるを得ない。つまり逆算によって収容冊数を求めるわけである。こうして80万冊という数値が決まった（面積は1m²当たり165冊で計算）。但しプランの最後の段階で地下の閉架書庫が一層増えたため、収容能力は最終的には115万冊となった。

3) 事務機能

事務室の面積の算定は、プログラムの作成上最も苦心したところのひとつである。これといった

基準もない上に、根拠もなしに広いスペースをとれば、他所からのひんしゅくを買う恐れがあるからである。そこで原則として、事務室ごとにそこで働く職員数の上限を定め、職員一人一人に仕事の内容に対応する必要面積（Metcalf の推薦値⁸⁾を参考にした）を割りふって、これを積算するという方法をとった。多層式の図書館では、本来は避けたい事務室の分散をある程度はやむを得ないとして許容したが、これを最少限にとどめるよう配慮したことはいうまでもない（その結果、パブリックサービスに直結しない事務室の殆ど全部を最上階に配置するという形ができた）。

4) 共通部分

共通部分とは、階段、廊下、トイレ、機械室、ダクトスペース、パイプスペースなどのような、本来の機能に充当できない面積の総称で、通常の建物では所要機能の積算値の30～35%が必要とされている。このプログラムでは、これを25～30%の範囲で計算した。

以上の手順によって仕事を進め、最終的には規模の上限である3,600坪の図書館のプログラムが完成した。このプログラムは、必要施設の目的・内容などを具体的に記述した文書や、設計において特に留意して欲しい事柄をリストアップした文書などと共に、昭和53年7月21日に設計者側に手渡された。

この日以降、情報センターと設計者との間には、基本設計の作成に向けて急ピッチで密度の濃い連絡が始まり、4ヶ月後の10月31日、新たに招集された建設委員会（仮称）⁹⁾において第一次案の呈示ができるところへ進んだのである。

5. 基本設計の検討

基本設計とは、プログラムが定義する活動を効率的に実現するため、建物の中に含める機能や施設の相互の位置関係を正しく定めることである。

本格的な図書館の設計を手がけるのはこれが始めてという権事務所との作業は、従って三田の図書館の活動やその問題点を詳しく説明することか

ら始まった。この段階を経ると、設計者はやがて原案を呈示するようになり、これに対して情報センターが意見を述べ、その意見を具体化した案を設計者がまた呈示するというプロセスを繰り返しながら完成度の高い案が次第に形成されていったのである。

ただ、もともと水平方向に拡がりをもつ機能配置が望ましい図書館の設計を、敷地の制約により多層式の垂直方向において行おうとするのだから、基本設計が容易でないことは初めからわかつていた。この条件では、あるポイントを得ようすれば、等しく重要な他のポイントを犠牲にせざるを得ない。その意味では、今回の基本設計は得るべきポイントを選択する作業に他ならなかった。

また、基本設計は防災基準の在存によって一層複雑になった。特に避難廊下の確保が図書館機能の犠牲を求める場合には、両者の調和の実現に苦慮することが多かった。

設計者と情報センターとで立案した約12,300m²の案は、10月31日と12月12日の建設委員会の審議を通じてさらに完成度が増したため、12月中には予定通り基本設計が完了する見通しとなった。このため情報センターのプランニングチームは大いに安堵し、12月14日、区切りをつける意味でのささやかな慰労会をもち、これまでの労苦を互いに思びあった。

この頃、「新図書館はもう一階増えるかもしれない」という、情報センターにとっては聞き捨てならない噂が入ってきた。真偽を確かめるため森理事に会見した高鳥所長は、そこで一階増やすのは事実であり、増やした階に斯道文庫、古文書室、歴史資料室の三施設を収容する方針である、という理事者側の意向を知らされた。これは、現図書館を研究室に使用させる、という方針のもとに現図書館に入居している、もしくは入居が予想される施設を新図書館に収容し、これによって研究室施設の拡張を図ろうとするものだった。

数日後、森理事が高鳥所長と4学部長とを招いて開いた会議において、高鳥所長はこの方針を最

終的に了承させられたのである。新しい方針の登場は、情報センターが立ち退く部分の拡充だけでは満足できない研究室側の明らかなゆりもどしの結果であった。

この決定を知った時、情報センターのメンバーは瞬間声をのみ、驚きの余りしばし語る言葉がなかった。三施設が情報センターとは組織的に何のつながりもない研究機関であるだけに、異質の機関の参入は苦心してまとめた基本設計にポッカリと穴をあけるばかりではなく、これまで検討を重ねてきた運営方針の大幅な修正も必至となつたからである。

この決定は情報センターにショックを与えたが、それが理論的根拠を云々する以前の、政策的に与えられた条件であるならば、それもけだしやむを得ないものと観念した。そして計画の進行がこれによって一層拍車がかかる事を期待して事態の推移を見守った。

一連の事の成り行きは、しかし新図書館計画のその後に重大な転機をもたらした。建設計画に対する認識も深まり、教員メンバーの関心も高まってきたこの段階では、こうした決定は思わぬ波紋を呼ぶものである。

常設の三田情報センター協議会において、半年も前から、2つの図書館の使用を前提に研究室図書と図書館図書との配置の仕方を熱心に討議していた教員側委員を、この決定は痛く刺激したのである。

年の瀬も迫った12月21日、今回の方針の説明と再配置問題の検討の延期要請とを行うため高島所長が招集した協議会は、かってない程に白熱し、情報センターの意志の統一のため、協議会史上初の途中休憩を入れねばならぬ程だった。結局センター側の説明は、委員の了解を得るところとはならず、今後の推移は予断を許さないものとなった。

この事態を収拾するため、森理事は協議会の委員の一部を新たに加えた拡大建設委員会¹⁰⁾を年明け早々に招集することを決め、問題の論議をそこで行うこととした。

6. 基本設計のやり直し

協議会委員を刺激した大きな理由のひとつは、現図書館を研究室が使用することによる必然的な結論—研究室図書は現図書館に収容する一に対する疑問であった。協議会はすでに半年も前から図書の再配置の問題に取り組んでおり、施設・環境ともに格段に優れた新図書館に研究室図書機能をどう組み込むかについて幾通りもの案を検討していた。新方針の提示は、こうした努力を一挙に水泡に帰せしめるものだったのである。

年明け早々の1月12日に開かれた拡大建設委員会は、従つて新方針の妥当性に関する論議の応酬の場となった。そして、この場において、以後は建設計画をこの拡大委員会に一本化して検討することと、新方針のうち、三施設の収容については白紙に戻し、当該フロアを研究施設としてどう使うかの代案を改めて検討し直すことの2点が確認された。

日を経ずして開かれた1月18日の委員会では、一転してほぼ完成直前にあった基本設計に対して批判の矢が浴びせられた。大は規模の問題から、小は階段の幅に至るまで、批判の対象は基本設計の全体に及んだ。このため、増設したフロアの使用法を含めて、基本設計を全面的に見直すことになり、藤沢理事を座長とする小委員会（作業部会）¹¹⁾を組織することが決まった。こうして以後の舞台は小委員会へ移ることになったのである。

小委員会に臨もうとするこの時期の情報センターには、焦躁感ともいいくべきものがあった。三施設問題の展開では一息ついたものの、原案が厳しく批判されたことはショックであったし、こうした展開が工期の遅れにつながることも気になつた。また、この頃から次第に態度を硬化させていた設計者側の今後の動向も気にかかったのである。

新図書館計画に決定的な役割を演じた小委員会は、こうしたムードの中で1月24日の第1回から、結論をまとめた3月12日の第7回まで、48日間で7回（但し初めの5回までは17日間）という

ペースで会合し、夜が更けるまで作業した。この間、欠席する委員が殆どなかった事実が、この問題に取り組む委員の真剣さを物語っていた。

小委員会は、日頃から図書館をよく利用し、図書館のあり方に关心を寄せる教員の集まりだったので、論議は正鶴を射るものが多く、それだけ情報センター側委員の緊張する場面も頻出した。

作業は、ほぼ完成していた基本設計の分析から始まった。そして、欠点を是正する対策を検討し、何度も図面を書き直すというプロセスを経て修正案(A)がまとまった。この過程では、かつて得るべきポイントとして情報センターが重視した位置関係が、別のポイントによって覆されるということもあった。思考の主体が变成了今は、それも当然の帰結だったのである。

しかし、まとまったA案にはフロア面積が狭いという致命的な欠陥があった。特に研究施設として使用するフロアの使途について、委員の大半はこれを研究室雑誌をまとめた総合資料室とする方向を望んでいたので、障害となる狭いフロアを改めるには、案を抜本的に見直す必要があった。また、入口の位置についても、とアクセスの便を重視した所を考えるべきだという強い意見もあった。

このため小委員会は、既存の制約にとらわれないで別の案を作成し、これをA案と比較して評価し、優先順位を付して親委員会に答申するという方針を定めたのである。

この間、A案をよしとする設計者との間には多少の軋轢があった。しかし理事者のタイムリーな仲介を経てそれも冰解し、小委員会は設計者の全面的な協力を得ることができた。

こうして誕生したのが、入口を西側につけ、フロアを1スパン上げたC案であった。

C案の前提には、福沢公園の削減と道路のつけ替えという条件が加わったが、もともとC案はA案の不備を直すために考えた案だったので、両案を比較した時、全会一致でC案をよしとしたのは自然の成り行きだった。

ただ2つの案は総面積が等しかったので、水平方向により拡がりをもつC案の方が機能的によりよく配置されているという点を除いては、規模や収容能力の面で2つの案に決定的な差異は存在しなかった。

「たてなが」のA案を「よこなが」にしたC案の優れた点は、地下をA案と同じ深さまで掘ることによって図書の収容能力を大幅に増やすことができるというところにあった。

そこで小委員会は、3月19日の拡大建設委員会においてC案を推薦し、増設フロアは総合資料室として使用することを勧告すると共に、地下をもう一層掘ることを強く要望したのである。

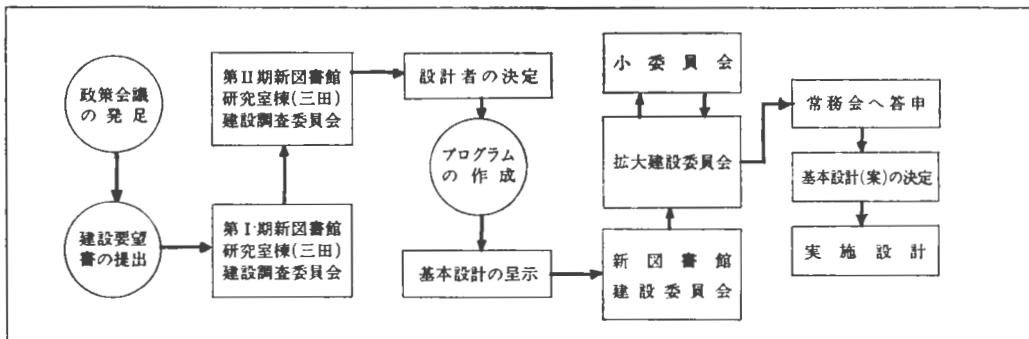
これらの提案や要望は同委員会において採択され、常務会に正式に答申された。そして間もなく、地下をもう一層掘り、総合資料室が配置されたC案(約4,600坪)を最終的な新図書館計画案とすることが、5月11日の最後の建設委員会において報告され、ここに基本設計が完了したのである。

7. おわりに

基本設計が難産だったせいか、次の実施設計はトントン拍子で進み、9月末にはほぼ完了するところにきている。建設に限っていえば、あとは建設会社が決まり、工事の認可を得て、評議員会の承認を得れば、工事の着工を待つばかりである。

しかし、情報センターの仕事はむしろこれから本番が始まる。中でも特に大切なのが図書の再配置を定めることであり、これは、情報センターの将来を方向づける大切な問題であるだけに、充分な時間と労力とをかけて正しい解答を導き出すことが望まれる。

最後に、今回の計画の流れを一覧できるようプロセスを図式化して次に掲げておく。このような大きな計画では、これをどう推進するかについての定式があるわけではない。それ故、このプロセスは即ち試行錯誤の繰り返しである。組織が健全であれば、仮に試行錯誤であっても計画は最後には収まるところに収まるものである。



新図書館計画のプロセス

1. 最初のメンバーは高島正夫, 石川博道, 安西郁夫, 柳屋良博, 笠野滋, 渋川雅俊, 東田全義の7名で, 第2回目からは田中正之, 白田勝己, 中島紘一が, 第4回目からは森園繁がそれぞれ新たに加わった。その後は人事異動によって三田以外のキャンパスに移った柳屋, 笠野, 白田が自動的に抜け, 政策運営研究会に拡大・改称してからは須田昭五郎, 宮本博光, 井上省三が新規に参加して現在に至っている。

2. この委員会のメンバーは次の通り。阪塙光男(委員長), 三雲夏生(文学部長), 大熊一郎(経済学部長), 石川忠雄(法学部長), 白石孝(商学部長), 高島正夫(情セ所長), 小谷津孝明(文), 大島通義(経), 倉沢康一郎(法), 佐藤芳雄(商), 宮家準(社研), 安西郁夫(情セ), 土屋与一(研・主事), 西村光吉(管財部長), 楠元一正(施設部長), 白神俊彦(経理部長), 青木安勝(事務局), 中島紘一(同), 酒井幸晴(同), 植竹佑吉(同), 谷戸祥晃(同), 事務局は情セ本部と企画課に置いた。

3. 昭和52年4月1~2日にかけて委員長, 学部長を中心に見学調査団を編成し, 同志社大学図書館, 同研究室を訪問した。また同5月24日には別のグループが九州大学図書館の見学調査を行った。

4. 高島正夫, 石川博道, 安西郁夫, 渋川雅俊, 中島紘一

5. この委員会のメンバーは次の通り。福岡正夫(委員長), 藤澤益夫(常任理事), 堀江湛(同), 三雲夏生(文学部長), 大熊一郎(経済学部長), 生田正輝(法学部長), 石坂巖(商学部長), 驚見洋一(文), 大山道広(経), 倉沢康一郎(法), 唐木匱和(商), 高島正夫(情セ所長), 安西郁夫(情セ), 土屋与一(研・主事), 酒井幸晴(施設部長), 村井実(社研), 植竹

佑吉(事務局), 中島紘一(同), 紺野美英(同), 石川武(同), 事務局は企画課に置いた。第3回から委員に西村光吉(管財部長), 事務局に青木安勝(管財課長)が加わった。

6. この間, プランニングチームは昭和53年1月17日に熱海の志ほみや旅館で, 同2月6日に芝のパークホテルで, それぞれ泊まり込みの合宿を行い, 集中的に原案を検討した。

7. 第Ⅱ期の委員会中に同志社大学図書館, 同女子大学図書館, 大阪学院大学図書館(いづれも昭和53年3月29日), 東北大学図書館(4月5日)の見学調査を行った。

8. Metcalf, K. D. Planning academic and research library building. McGraw-Hill, 1965. p. 129-132

9. この委員会のメンバーは次の通り。森為可(委員長), 三雲夏生(文学部長), 大熊一郎(経済学部長), 生田正輝(法学部長), 石坂巖(商学部長), 驚見洋一(文), 寺尾誠(経), 倉沢康一郎(法), 工藤教和(商), 高島正夫(情セ所長), 石川博道(情セ), 安西郁夫(同), 渋川雅俊(同), 酒井幸晴(施設部), 紺野美英(同), 中島紘一(事務局)

10. 新たに追加されたメンバーは次の通り。藤澤益夫(常任理事), 清水潤三(文), 鳥居泰彦(経), 川口実(法), 田村茂(商), 内山秀夫(研・運営委員長), 小川隆(文)

11. この委員会には次のメンバーが選ばれた。藤澤益夫(座長), 大島通義(常任理事), 驚見洋一(文), 高宮利行(文), 寺尾誠(経), 鳥居泰彦(経), 川口実(法), 田中俊郎(法), 田村茂(商), 工藤教和(商), 内山秀夫(研・運営委員長), 安西郁夫(情セ), 渋川雅俊(情セ), 中島紘一(事務局)

大学図書館・研究室・教室の一体化

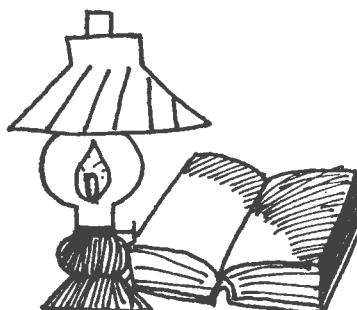
江野沢 一 嘉

学会などで他大学を訪れる際、私は、その大学の図書館や研究室や教室がどういう風に配置されているかという視点から、キャンパス全体の建物群を眺める癖がある。日ごろ私は、日吉のキャンパスで図書館と研究室と教室との間を、日に何回となく、駆け足で往復しているので、他大学ではこれらの建物の配置がどうなっているのだろうという点に、つい注意が向いてしまうのである。

そういう関心から、いくつかの大学について、キャンパスにおける図書館・研究室・教室の配置を観察すると、分散的だという印象を受けることが多い。大学によって立地条件が異なるので、一概には言えないが、図書館と研究室（棟）と教室（棟）とが独立・分離しているところが少くないの

このような分散型の配置がはたして理想的であるかどうかという点になると、私はきわめて懐疑的にならざるをえない。立地条件の制約から、やむをえず分散的に配置するというなら話はわかるが、何万坪もの敷地に新しくキャンパスを建設する際に、わざわざ図書館から遠く離れた場所に研究室棟や教室棟を建てたという大学も現にあるのである。なんとも解せない話だ。

私は、立地条件が許すかぎり、図書館と研究室と教室（とくに小教室）とはできるだけ近接させ、集中的に配置するのが望ましいと思う。キャンパスの中心に高層の、堂々とした図書館が聳えている。そして、これを取り囲むような形で、研究室と教室が隣接し、直結している。図書館と研究室と教室を結ぶ通路には、教員と学生と、そして文献（というより情報）が、絶え間なく環流している。図



書館を心臓に見立てれば、血液が循環するように情報の流れが研究室と教室を貫いている。これが私が抱いている、一体化した図書館・研究室・教室のイメージである。

入念に収集され、整理され、蓄積された文献（情報）を効率的に提供するサービスの場が図書館である。研究室はここで提供された情報を分析したり組立てたり一要するに、処理する場である。学生の場合は、読書室や自習室がこれに相当するわけだ。こうして処理された情報を持ち寄って、それをもとに討論・対話が行われる場が小教室（あるいは演習室）ということになろう。大教室あるいは

講堂というのは、図書館あるいは研究室と切離して、別個に配置しておけばよい。

異論があるかもしれないが、大学における図書館・研究室・教室の果すべき機能とは、上に述べたようなものでなければならない、と私は考えているのである。そういう観点から言え

ば、それらの施設をキャンパスの中央に集中的に配置するのがもっとも機能的ということになろう。最近の図書館建築関係の雑誌のグラビア写真でみると、大学図書館内部の機能に関していえば長足の進歩が認められるが、キャンパス全体に占める図書館・研究室・教室の適正な配置という観点からみた設計上の配慮はまだ充分とはいえないようだ。

近々、三田キャンパスの中央に高層の近代的図書館が着工される予定だと聞く。慶應義塾の質的発展には図書館の整備・拡充が急務だという三田の教員の認識の反映であろう。この認識は、日吉の教員の間ではいっそう熾烈で、切実なものがある。教育と研究の両面で高度の機能を發揮する強力な図書館—研究室と教室の機能を有機的に結合したユニークな図書館—が日吉のキャンパスにも、早急に実現することを期待してやまない。

(经济学部助教授)

三田に実現した MARC データのオンライン検索

三田情報センターでは、従来より、外部整理技術の導入の意味で、LCカードの購入、それに引き続き、MARCカードの購入を行なって來たが、昭和54年4月より、それと並行して、アジア経済研究所のMARCデータ・ベースにオンラインでアクセスする端末機器を設置して、MARCの提供する書誌情報を、より速やかに利用出来る体制を整えた。ここでは、その概要を紹介する。

背景 Centralized Cataloging の発想は、1901年のLC印刷カードの配布、1966年以降の National Union Catalog の出版、そして1969年以降のMARCの実用化と、着々と、時代の要請に沿って具体化して來た。そして、現在、目録業務を考える上で、広域かつ大量な情報を、速かに、かつ的確に処理する為に、機械可読のデータ・ベースは、欠くことの出来ないものとなっている。そのMARCは、1969年のフォーマット改訂以後、収録範囲を、英語から、仏語、独語、西語…と広げている。この様な動きは、米国のみならず、各国に広がりつつあり、各国が、独自のレベルで、機械可読のデータ・ベースを持ち、その上のレベルでの書誌的標準化を行ない、国際的なデータ・ベースを作り上げる方向に動いている。こんな状況を考え合わせてみると、今回の端末器の導入は、単なる一業務の機械化に止まらず、三田情報センターが、国際的な書誌情報ネットワークに携わったことをも意味するもので、今後の目録業務、及び、より広義な図書館業務に、新しいベースペクティブを与えるきっかけと成り得ると考えられる。

MARC このシステムは、図1で示す様に、アジア経済研究所のIBM-370と、三田情報センターのIBM-3270(表示装置)及び、IBM-3287(印字装置)を、電々公社の公衆回線で結

び、ソフト・ウェアとして、IBMのSTAIRS(Storage and Information Retrieval System)を使用する、オンライン書誌情報検索システムで、そのデータ・ベースが、MARCである。MARCとは、Machine Readable Catalog の略で、アメリカ議会図書館(Library of Congress)の収集した、あるいは、収集予定の資料の書誌情報を機械可読にしたものと意味する。著作権法との関連で、LCは、アメリカ国内の出版物に対しては、かなり網羅性の高い収集を行なうことが可能であり、かつ、英語出版物及び、他国語出版物に対しても、積極的な収集を行なっている為、MARCは、その収集範囲については、比較的、国際的な色合いを含んでいえるといえる。

検索方法 オン・ライン検索では、従来の冊子体目録等と比較して、より多くのキー・ワードによって、機械と対話しながら作業が行なえるのが特色といえる。検索のキー・ワードとして用いることが出来るのは、検索実例(○)に示した、次のフィールド中の言葉である。

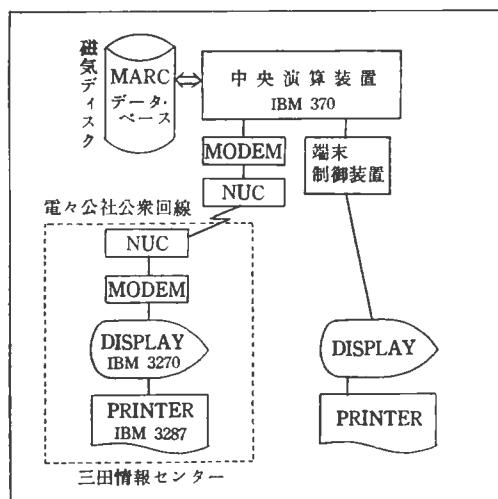


図1 システム構成図

- 1) 出版年 (DATE)
- 2) L C カード番号 (CARD)
- 3) ISBN
- 4) エリア・コード (AREA)
- 5) L C 分類 (LC)
- 6) D C 分類 (DC)
- 7) 著者 (基本標目) (AUTHOR)
- 8) 書名 (TITLE)
- 9) 出版社 (IMPRINT)
- 10) そう書 (SERIES)
- 11) L C 件名標目 (SUBJECT)
- 12) 共著者, 編者, 団体名, その他

検索実例(A)に示す様に, これらのフィールド中の言葉を, ワード単位で検索して, データにアクセスする。その際, 1~12のすべてのフィールドを探すことも出来るし, この例の様にフィールドを限定することも可能である。同時に, 演算子によって, 論理演算検索をすることも可能である。検索式を入力すると, 同(B)に示す様な, 検索結果が表示される。この結果に基づいて, これに, キー・ワードを更に付加して, より深い検索も可能であり, 又, 同(C)に示す様に, ヒットした文献の書誌情報をディスプレイすることも可能である。これらの結果は, 表示装置によるディスプレイ, 印字装置によるハード・コピー, 及び, ナフ・ラインによる印刷カ

ードの3種の形態によってユーザーに提供される。なお, このシステムで検索可能なデータ・ベースは, 常時, 過去5年間に限られ, 範囲は, 単行本である。

業務への応用 以上の特色を生かした実務への応用として, 次の様なことが考えられる。

- 1) MARC印刷カードのプリント
- 2) カタロギング作業の参考
- 3) 選書情報
- 4) 主題文献リスト作成

1) は, 整理課洋書部門で, 現在MARCカードによって処理される資料が全体の40%を占める状況を考えると, その効果は, 決して小さくはない。2) は, *National Union Catalog*に比較して, 検索語が多く, 過去5年分のデータが累積されているため迅速かつ多様な検索が可能になった。3) は, 1979年以降のデータに対して, 出版者, そう書名をも検索語として利用出来るようになった為, 利用可能性はより大きくなった。そして, 4) は, レファレンス・ワークにも属するものであるが, 利用者への直接的サービスとして, 今後が期待されている。そして, これを効果的に実用化するため, ノイズの少ない満足のいく検索結果を得る為の担当者の情報検索手法のトレーニングをも含めて, さらに研究・開発を積み重ねる必要があろう。

検索実例

AQUARIUS - SEARCH MODE - BEGIN YOUR QUERY AFTER THE STATEMENT NUMBER

(A) 00001 lord.title. with rings.title.

(B) LORD
RINGS
RESULT

	1427 OCCURRENCES	1199 DOCUMENTS
	228 OCCURRENCES	157 DOCUMENTS
	11 OCCURRENCES	11 DOCUMENTS

(C) XXX660009530 DOCUMENT= 5 OF 11 PAGE = 1 OF 1

DATE 1965	>
CARD 66-953	
LC PZ0003.T0576	
AUTHOR Tolkien, John Ronald Reuel, 1892-1973.	
TITLE Lord of the rings, by J. R. R. Tolkien. With a new foreword by the author.	
IMPRINT New York, Ballantine Books (1965)	
COLLATION 3 v. maps. 18 cm.	
NOTES Contents. Pt. 1. The fellowship of the ring. -- Pt. 2. The two towers. -- Pt. 3. The return of the king.	
TRACING The fellowship of the ring. The two towers. The return of the king.	
END OF DOCUMENT	

研究室における文献収集と管理



福川 忠昭

(工学部専任講師/経営工学)

7月は例年慌しい月である。勿論、前期末テストが行なわれるということもあるが、それよりも、夏休み中に精読したい論文や、研究室の学生に読ませたい論文のリスト作りと、その入手の手配とのためである。学生には4月から基礎的な原書を2冊輪読させてきており、いよいよ各自の研究テーマにそって専門誌の文献を1人で読ませるわけであるが、その結果は8月末の合宿で発表報告させることとしている。

理工学科の中でも、経営管理活動の分野を研究テーマにしている関係から、経営科学や数理科学だけでなく、社会学や心理学の方面の知識や研究の成果にも目を通しておくことが欠かせない。いまは意思決定に及ぼす情報の効果や業績に及ぼす影響要因の抽出、業績評価のあり方などに興味を持っている。目的や計画を設定する意思決定問題のアプローチには、どんな情報をもとに、どのように決定をすべきかという規範的なものと、実際に人はどんな情報を、どのように用いて決定を下すのか、あるいは下しやすいのかといった人の決定行動を分析する記述的なものがある。決定が情報を規定すると同時に、情報が決定を規定するわけで、経営管理システムを設計し、その有効性を評価するにはこの両方のアプローチが必要である。決定理論や数理計画法、とりわけ複数の目的をバランスよく達成するように計画する多目的計画法と呼ばれる経営科学の一分野の研究を進めるとともに、情報が示す状況の不確実性を人がどのように評価するのか、また状況を規定する各種要因の間の関係をどのように学習していくのか、

さらには人が仕事の開始にあたって達成目標をどのように設定したり、実績にもとづき修正・変化させていくのか、そしてそこでは情報の提供がどのように介在しているのかといった行動科学としての研究の両面から進めている。また実際のフィールド研究としてチェーン展開を目指す小売業や飲食業などの出店計画問題や、水資源の利用問題を取り上げて研究を進めている。店の業績要因の抽出や配水量の制限に伴う各利用分野における被害の見積りからはじまり、どのような出店の仕方をするのが望ましいのか、あるいは水資源の配分を考えたらよいのかといった問題を扱っている。

こうした学際的な研究領域にいるため、矢上台の理工学情報センターが行なっているコンテンツ・サービスは大変助かっている。現在10種の論文誌について依頼しているが、多数の論文誌を短時間ではとても目を通しきれないので、コンテンツ・サービスで題名や著者により、一応の目安をつけ、折をみて論文に目を通して必要なものは複写をとるようしている。しかしながら、矢上台で扱っている論文誌も多いようで、社会学系や心理学系はごく一部であり全部はカバーできない。そこで3月、7月、11月といった頃に塾の他の研究機関でとっている論文誌類を、学生と手分けして集中的にリファーすることにしている。日本科学技術文献速報や、他の専門別の文献抄録誌、学会誌の文献紹介欄なども利用し、重要なものはその都度複写依頼を理工学情報センターにしているが、やはり実物を目にすることにこしたことはないで、なるべく論文誌に実際にあたるようにしている。

人の情報利用の仕方や目標設定、学習などの実験関係の論文は日吉の心理学教室の図書室を利用させていただいている。情報科学研究所の図書室は経営情報や管理情報システムについて関係のある論文を、マーケティング関係や組織心理学関係などは慶應ビジネス・スクールの図書室や三田の経営資料室などでお世話になっている。時として目差す文献類が既に長期借出しされていて入手に手間どることもあるが、どこでも親切に余所者の相手をしてくれるのには有難く思っている。

フィールド研究で必要な統計資料は、各情報センターでも揃えているのだろうが、国会図書館や総理府統計局の統計相談室を利用して、使えそうな統計資料の所在を探し、政府刊行物サービス・センターなどで購入してくることが多い。必要に応じて色々な項目に加工処理をほどこせるようになると、その都度、項目のデータを収集するのは厄介なので使えそうな統計資料類はなるべく自分の手元に買い揃えるようにしている。全国を市レベルでとらえ、各市についてその歴史的、地理的、社会的、経済的な諸側面のデータを揃えているが、項目による調査年度のズレをはじめとして、時系列的にみると市によって途中項目に欠落があったりするので、なかなかほしいデータが揃わないで困ることが多い。

こうした各種の統計資料や、企業の有価証券報告書類などはできるだけ全塾レベルで揃えるようにしてほしいが、その場合、使う側での2次加工のことを考えると、データファイルとして計算機のテープが市販されだしているのでそういうものをできるだけ購入し、必要とする利用者に自由に使えるようにしてもらえるとよいと思っている。こうしたもののは購入と運用管理は情報センターがやるべきことなのか、情報科学研究所の扱いなのか、どちらにしてもそれぞれ問題があるとは思うが、計量経済の分野や企業の計量分析を研究されている方々にも同じような要求があるのではないかと思うので、早く体制を整えてもらえばと思っている。

こうした情報収集の他に、国内での入手が困難であったり、入手に時間のかかりそうな場合、米

国のものであれば、研究室の卒業生が例年1人や2人留学や会社からの出張で滞米しているので、手紙を出して必要なコピーを送ってもらったりしている。古い文献や調査の質問紙などを米国の国会図書館に頼んだことがあるが、その場合マイクロフィルムで送られて來たのでハードコピーをとるのに更に時間がかかったが、それ程待たされることもなかった。論文の著者に直接依頼することもあるが、古いものだと著者の所在をつかむのに時間がかかるので、いわば卒業生を現地駐在員として論文や情報の収集の手助けをしてもらっている。

こんなわけで、論文を読む前に研究室に入ってきた学生には、まず研究室に関係のある論文誌や雑誌類がどこに所蔵されているか、そこはどこか（住所、電話番号、地図など）、入手のための必要な手続き（例えば入庫票がいるか否かなどの条件）、入手までに要する時間や複写は自分ですか否かなどをファイルした自前の図書館の利用手引きを読ませている。いくつもの研究領域にまたがる研究テーマの場合、どうしても関連文献が多方面にわたるため、それらを全て直接手にして探すことは多大な時間と労力を要することになる。同じ慶應の中でも違った場所で集められているし、同じ日吉や三田でも図書室や資料室がいくつにも分かれているので文献を直接手にするのも仲々面倒なものである。限られた予算の中で文献類を収集しなければならないのだから、同じものを多くの研究機関で集めるのは贅沢というものだろうが、工学と医学の間にも見られるように、境界領域的な研究や、研究方法、分析方法の上の学問間の相互補完が強まっていく中で、それを助ける情報センターの役割に期待するところ大なるものがある。矢上台だけでなく、他の情報センターや図書室からのコンテンツ・サービスだけでも始めてもらえないだろうか。

集めた論文はカードを作り、またテーマ別の論文リストに登録している。論文のうち、主要テーマに直接関係するものはテーマ別に、それ以外のものは出典誌別にファイルするようにしている。読んだ論文は研究室で作ったA4版の黄色の抄録

紙に、論文に関する必要事項とその内容の抄録を記すようにしている。そしてこれについてもテーマ別にファイルするようにしている。

管理工学の研究の一部は、文献がいわば他の工学部の機械や設備装置にあたるようなところがあるので、自ずから関連文献の収集とその保管に力を入れ、また検索しやすいように、各研究室とも工夫をこらしているようである。

しかしながら、年々増加するこうした論文やカード、抄録紙を維持・管理するのもまた少なからず苦労である。できるだけ利用しやすく、必要な情報を簡単に引出せるように、かつ維持・管理が容易なようにシステムティックな取扱いができるようにしておきたいのだが、年々テーマが拡がり、研究の視点が変わることは避けられないのでも、こうした変化に対応できるようにもしなければならない。現在のやり方も、その最適規模を超えているのではないかと思われるが、抄録紙の再デザインを中心に、もっかバージョンアップを図る必要性を感じている。

文献ではないが研究室で関連する問題に、何年間にかわたる研究プロジェクトの場合、計算機のプログラムとデータの保管の問題がある。年々学生が統計処理のプログラムや数理計画のプログラムを作るが、前もってコメントを多く入れてわかりやすく、汎用性のあるものを作るように、またユーザース・マニュアルを作るように指導している

が、仲々うまく次の学年に引き継げないでいる。統計データのカードおこしは時間がかかるので無駄な作業はなるべく除きたいのだが、やはり先人は勝手に加工処理をしたがるし、後を引き継ぐ方は人のいじりまわしたプログラムやデータを判読するのを面倒臭がるというわけで、同じようなプログラムやデータが何本もできていながらどれもみな少しずつ違うといった具合いで、こればかりは賽の河原の石積みの感を深くしている。プログラムは汎用のプログラム・パッケージが使えるようになってきているのでそれを使うようにしても、データについてはできるだけ汎用な形式で保持していくように指導を強めている。

文献のファイル、抄録紙、統計資料、調査データ、これらはいずれも財産である。しかしながら、この財産は“金”や“骨董品”と違ってただ持っているだけではほとんど価値のないものである。テーマを育て、解決のアイディアを生み出すのに使ひ、はじめて価値を持つものであり、どれ程の価値を生み出すかは全て利用する側にかかっているわけである。ファイルの背表紙の汚れ具合はそのまま自分の研究テーマの変遷を表わしており、研究への力の入れ具合を示しているようでもある。“もっと掘り出せ宝の山を”と遙々として進まない研究を半ばあきれ、半ば脅迫するかのように、部屋の棚の上のファイルが今日も見下している。

＜研究・教育情報センター刊行物案内＞

本部事務室

慶應義塾大学受入雑誌リスト 昭和54年版
同上（予備版） 昭和52年版
KULIC 昭和45年（No.1）より

三田情報センター

慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題 昭和33年刊
慶應義塾図書館史 昭和47年刊
文献シリーズ
No. 10 手形法・小切手法 昭和46年刊

連絡先：本部 453-4511 内 3027 * 三田 同左 * 医学 353-1211 内 2751 * 理工学 044-63-1141 内 2305

- No. 11 経済学関係記念論文集記事索引—昭和43年12月現在—昭和46年刊
No. 12 慶應義塾図書館所蔵 江戸期地誌 紀行類目録稿 昭和47年刊
No. 13 外国辞書目録 アジア・アフリカ語篇 昭和48年刊

医学情報センター

医学文献シラバス 昭和54年9月刊

理工学情報センター

学術雑誌目録（1977）昭和53年刊

米国西海岸の大学図書館を視察して

須田 昭五郎

昨年9月中旬から10月初め迄の約20日間、塾派遣の短期海外研修班の一員として、米国西海岸のスタンフォード大学、UCB、UCLA、そしてハワイ大学を歴訪して、数多くの貴重な見聞に接する機会に恵まれた。

一行の研修目的は、新学期における学生向窓口サービス事務の調査にあったので、それぞれの大学で、国際センター、教務・学生部、図書館をはじめ学生に関係ある部署・施設を見て廻った。なかでも図書館員である私には、これら著名な大学の図書館見学に強い関心があった。

先ず最初に、サンフランシスコの南東50kmのパロ・アルトという静かな郊外の町にある西海岸の代表的私立大学スタンフォードを訪れた。スタンフォードが今回の主要な研修校であった為、パロ・アルトに全日程の半分近くの8日間滞在し、内5日間をスタンフォード大学での研修に当てた。

横の大木の林に囲まれた1,040万坪の広大なキャンパスには、大学の中央図書館である蔵書158万冊を有するGreen Library、蔵書数(15万冊)こそ少いが座席数1,500席を有するUndergraduate LibraryのMeyer記念図書館、さらに研究所やSchoolに属する"Coordinate Library"として蔵書120万冊を有するHoover研究所図書館や大学院課程のLaw School Library(蔵書25万冊)などBranch Libraryを併せて20数館の図書館が点在し、これら図書館を併せた全蔵書は450万冊(全米大学中8位)に及んでいる。利用者である学生数は11,000名、教員1,100名、それぞれの図書館の利用対象は、専攻別等によって自ずと振り分けられているが、利用者は必要があれば随時何の図書館をも利用できる。州立大学であるUCBやUCLAでも学生数は多いが、図書館の規模はほぼ同じである。日本の大学に比べると遙かに恵まれ

た勉学研究環境を有していると言えよう。

図書館サービスの内容の面では、スタンフォード大学で開発した"BALLOTS"という書誌情報の維持・検索を機械化したシステムが特に目をひいた。この"BALLOTS"のファイルにはスタンフォード大学図書館所蔵の全資料(雑誌やNonprint資料も含む)のCatalog Data FileとLCC(議会図書館)のMARC(機械可読目録)ファイルが含まれているが、このシステムにはUCBなど60の大学が加盟していて、スタンフォードが全国ネットワークのメインになっている。このシステムがレファレンスでの情報検索に威力を発揮していた。

わが慶應でも三田情報センターに今年度からアジア経済研究所と提携して、MARCデータをオンラインで利用できるわが国最初の端末機を設置してすでに稼動を始めている。今のところ主に目録作成上の検索に利用している段階であるが、将来は利用者に対する情報サービスにも大いに貢献することになろう。

また利用者に直接関係する開館時間や貸出冊数においても、日本の現状と比べると利用者にとってかなり恵まれた状況にあると言える。開館時間についてはUndergraduate LibraryとLaw School Libraryが夜12時まで開館しており、貸出冊数も特に制限をしていない。この背景にはアメリカの大学が原則として全寮制をとっており、教職員・学生がキャンパス内に居住していること、又大学の授業が図書館利用を必須にしていること等、日本の大学と単純に比較できない事情もある。それは兎も角として、欧米の大学が日々の図書館サービスを支えるための人的・物的体制を質量共に備えていることを見落してはならない。

慶應でも三田に新図書館を建設する準備が現在着々と進められており、昭和57年にオープンの予定である。新図書館建設と相俟って、図書館サービスも今後漸次改善されていくであろう。「図書館は大学の心臓である」というコトバを利用者の誰もが実感できるような図書館に育ててゆきたいものである。

(三田情報センター閲覧課長)



女性図書館員就業意識調査

1976.6 ~ 1978.5 を省みて



この調査を行った1977年からすでに2年の歳月が過ぎた。この間に慶大情報センターでは女性職員の3分の1が退職し、新しい人と入れ替った。わずか2年の間にこの「タイトル」をみてもピンとこない女性職員がずい分増えた訳だ。女性の回転の早さを改めて思い知らされた気がする。

「女性図書館員就業意識調査」は、私立大学図書館協会加盟館の1000名を対象に行なわれた。これは図書館界において初めての試みであり、慶大情報センターのサービス能力の向上を考える上でも、有意義に思われた。

現在、図書館界において第一線で活躍する女性図書館員の占める割合は大きくしかも近年ますますその傾向を強めている。しかしその一方では、慶大においてみられるように、女性に固有の「結婚、出産による離職率が高い」という状況がある。長期にわたる経験や知識に頼るところが多い図書館では、この状況は問題が多い。こうした現状を分析し、考慮することは、人的資源の充実をはかるうえで大切なことである。詳しい調査の内容とその結果は、「塾監局紀要第5号」および「Library & Information Science No. 16」に発表してあるので、今回はプロジェクト員の中の女性だけで、その後の反響などを中心に感想をまとめてみた。

* * *

調査結果を発表した後、アメリカから一通の手紙がまいこんだ。イリノイ大学図書館に勤める、

池田 久子

(理工学情報センター)

石黒 敦子

(三田情報センター)

並木 和子

(医学情報センター)

宮入 晓子

(日吉情報センター)

一人の子供をもつ既婚女性からであった。

"In the U. S., many women used to leave work for several years to raise children. Some still do, but more and more only take the set period of maternity leaves and return to work immediately. There are many reasons for this trend, but one of them is that it is very difficult to get a *nice job* again. No one ever expects to get back to the same job after several years."

"It is my belief that professional women should try to work under the *same conditions* as men, and should not ask for *special treatments*." (イタリック筆者)

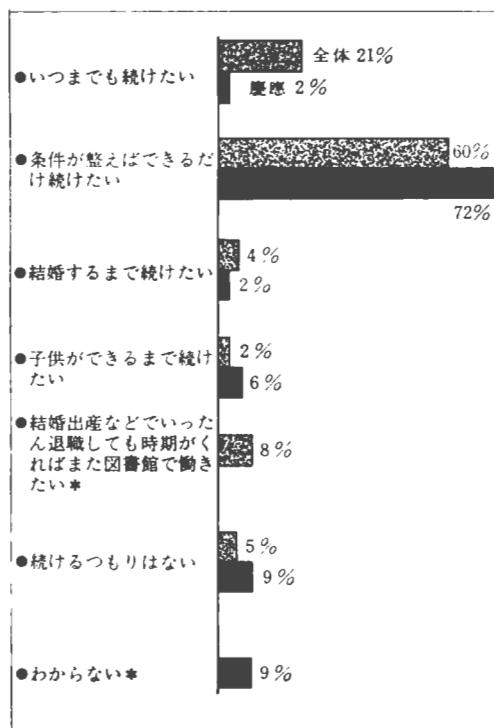
この文は、彼女の手紙の抜粋である。日本より一步進んだアメリカならではの就業意識といえよう、「すごいな。すばらしいな。」と思うと同時に、「でも日本の状況では難しいわね。アメリカでは、みんなこうなのかしら」という率直な感想も湧いた。短かい手紙なので、どういう業務に携わっている人なのかも、どういう立場にいる人なのかもはっきりしないので、この姿勢がどんな状況の結果としてあらわれてきたのかに、疑問が残った。

確かに、将来女性の仕事に対する姿勢はこうならねばならないというよい手本ではあるが、日本では、まだこうした意識が全体にゆきわたるには、日がかかるようと思う。*"special treatments"*を取りのぞく前に、完全な*"same conditions"*が日本では望めないのでないだろうか。しかし、

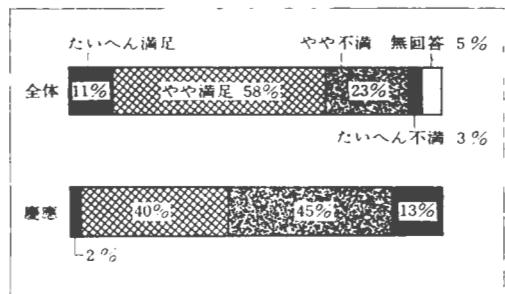
現実的には無理だと思いつつも、こうした女性の堂々とした意識をみせられるのは、大きな励みとなり、羨しくもあり、色々な意味で考えさせられた。

このような意識をもてるようになるために、女性自身の自覚が必要なのはいうまでもない。仕事に対する熱意とサービス向上にむける意欲があれば、安易な離職は避けられよう。結婚や出産が一番その障害となるわけだが、結婚しているから、子供がいるから、他の人とは違うから、という気持ちを女性がもつのが、最も危険なのではないだろうか。

ところが、実際に現在女性のおかれている状況をみると、必ずしも意欲のなさや意識の低さだけが、離職の理由につながるとも思えない。今までに行なわれた各種の女性意識調査に比べて、今回の図書館員の場合顕著なのは、「条件が整えば続けたい」という意見が全体の70%近くを占めていることである。このことは、意欲がありながらも辞めなければならないという現実を示しているも



就業継続の意志



現在の仕事に対する満足度

のといえないだろうか。

たとえば、結婚して夫が妻に家事専念を要望しても、妻が仕事を続ける例が近年ふえている。しかし出産となると、よい公立の保育所に入ることが許されるか、妻の母親などが子供を預かって育ってくれるか、あるいは、金銭的に恵まれていて私立の保育所などに預けることができるか、等の条件に左右され、必ずしも本人の思い通りにはならない。そして金銭的に恵まれている場合は、「ムリに働かなくてもよいではないか」という意見に押し流されるのが、多くの場合ではないだろうか。とにかく子供の保育を保証する何かが得られない、全くお手あげの状態である。夫の仕事を優先とすれば、妻が仕事を辞めるほかない。又、夫が転勤を命ぜられた場合、妻が別居しても仕事を続けるという例は稀れである。こうした問題は再雇用の道を開いてもらっても、解決するとは思えない。おそらく不可抗力に近いのではないだろうか。いずれにしても、女性は自覚をもって現状をふまえ、前途を切り開いていくことをまず考えねばならない。「結婚しているから」という甘えが、女性の仕事を日常業務に限定し、その結果長期にわたるプロジェクトから、はずされるといった事態を自ら招いているのではないだろうか。

このため、職場における仕事の分担においても男女による違いがあらわってくる。慶大情報センターにおいては、職員（専任職員と事務嘱託）の内、58%が女性で占められている。この数字をみる限りでは、女性の割合がそれほど多いとも思われない。しかし、この中から管理職を除いてみると、たちまち割合は増加し、全体の76%が女性と

いう実態が現れてくる。つまり現場の業務に携わっているのは、ほとんどが女性であるということがいえよう。又24%を占める男性は、総務関係の担当者が多く、図書館固有の業務に携わる者は少ない。女性の場合は、図書館大会や研究会などの短期的研修に参加することで、いっとき日常業務から離れることができる一方で、男性は将来に向けての長期的な展望にたって、自己研修ともいるべき仕事をまかせられているケースが多く、大学院における研修の機会も与えられている。また情報センターの政策・中枢に触れる機会にも恵まれ、自分のペースで仕事を運びやすいように配慮されている。

そうした個人の資質によるのではなく、男女の性別による業務分担や機会の不均等が、女性に与える影響は大きい。このような現状では、女性は現場の繁雑な業務に追われっぱなしで、疑問点を解明していく時間がない。これは、専門職としてのみがきをかける上で、大きな障害といえよう。女性の労働意欲を向上させるという点について女性、男性共に自覚をもつことが、イリノイ大学の状況につづく段階の第一歩に思える。

現在の図書館界では、女性が結婚や出産で退職するのはやむをえない場合もあるだろう。しかしそれをするにしても、それなりの責任をはたし、引きつぎを行なって、少しでも他に負担をかけないようにすべきではないだろうか。

今回の「女性図書館員就業意識調査」を通して感じられるのは、はじめは女性に固有の問題として登場した事柄が、それに影響を与える大きな要因として、実は男性の意識・自覚と無関係ではないということがわかつてきたことである。女性図書館員を論ずることはとりも直さず、男性図書館員、またひいては図書館全般を論ずることでもある。男性側の自覚や、図書館における“same conditions”が女性側の自覚をうながすことにもなろうし、女性側の自覚が“same conditions”につながることにもなろう。

はやく“same conditions”的もとで“special treatments”をのぞまずに図書館の仕事ができるようになることを願いたい。

「図書館で今後も仕事を続けるためにはどんな条件が必要だと思いますか」という設問に対する回答

個人条件の選択順位

個人の条件	順位	
	全体	慶應
図書館の仕事について専門的な知識や技術を修得する	1	2
地道な努力と忍耐	2	1
幅広い教養を身につける	3	4
特定の主題分野で深い知識を持つ*	4	—
サービス精神	5	5
協調性	6	3
指導力	7	6

職場条件の選択順位

職場の条件	順位	
	全体	慶應
仕事が正しく評価される	1	1
図書館がよく管理・運営されている*	2	—
女性に対する偏見がない	3	5
責任と権限が与えられる	4	8
出産・生理休暇など母性保護の条件が整っている	5	1
勉強の機会がある(研修や講習会など)	6	6
専門職制度が整っている	7	7
労働時間が短く休暇が多い	8	3
給与がよい	9	3

家庭条件の選択順位

家庭の条件	順位	
	全体	慶應
家族や夫の理解と協力	1	1
家族がそろって健康である	2	3
子供の保育条件が整っている	3	2
通勤時間が短い	4	3
家事の負担が軽い	5	7
勉強時間がとれる	5	6
夫の職業が共働きにあって(転勤がないなど)	5	5

(図表注)

1977年の調査では、無記名なので、慶應の数値のみを抽出することはできなかった。従って図表の慶應の数値は、本調査の前に慶應で行った予備調査の結果を使用している。予備調査と本調査の間には、多少の項目の差違があるため完全な比較にはなりえないが、参考として掲載した。

*は予備調査にはなかった項目である。

虚子文庫について

本 井 英

本年は近代俳句界の巨匠高浜虚子が逝って二十年という年にあたり、4月9日～11日の三日間、三田図書館展示室に於ても「高浜虚子展」が催され、塾内外から多くの観覧者を得たことは、いささかお手伝いをした筆者としても喜ばしいかぎりであった。

そこで先般の展示会の資料を保管している「慶應義塾大学虚子文庫」について、その概要を御紹介することとする。

本文庫は、高浜虚子令息年尾氏（俳誌「ホトトギス」主宰）の塾に対する並々ならぬ御厚意から、去る昭和49年夏、鎌倉、旧虚子庵架

藏の虚子手沢本598点が寄贈され（残りの三千余点については愛媛県立図書館俳諧文庫へ）、併せて明治期俳句資料（子規・虚子・碧梧桐ら一座の俳句会稿など）が研究寄託されたのを機会に設立されたものである。実際の整理研究にあたっては、森武之助文学部名誉教授、清崎（星野）敏郎文学部講師（俳誌「若葉」主宰）を中心に、筆者らが作業を行っているもので、久保田万太郎記念資金の協力を得て運営されている。

寄贈書籍598点の目録については、幸い本年4月慶應義塾大学国文学研究会により『慶應義塾大学虚子文庫目録』が上梓されているので、それによられたいが、本稿ではそのうちの二三及び寄託資料（現在整理作業中）の中から一二点について簡単に紹介しておこう。

『ホトトギス雑詠全集（全12巻）』（昭和7年刊）——「雑詠」とは、特に題をさだめずに雑誌購読者から投句を募り、選者が好句を選抜して誌上発表するもので、現在ではほとんど全ての結社俳誌に見られるものであるが、制度・名称はすべて虚子のアイデアによるものであった。「ホトトギス」には明治41年10月から翌42年7月までと、大正元年7月以後

（現在まで）雑詠欄が設けられているが、その厳選は有名で一句入選するまでに何年もの俳句修行が必要であったという。その雑詠欄全入選句（昭和5年まで）を類題別に編集したのが本書であるが、さすがに虚子手沢本であるだけに虚子自身の手による批点、書き入れが随所に施されており、『ホトトギス雑詠選集』（昭和13年刊）への再選過程が一目瞭然される貴重資料といえよう。

『寒玉集』（明治33年刊）——本書は所謂日本派の叙事文（写生文）集の嚆矢と目されるもので、就中虚子の「浴泉雜記」に施された朱筆からは当時の虚子の文章観、或いは文学観が垣間見られて興味深い。

『La Muse Française』（1932刊）——本書はフランスの文芸雑誌であるが、Fernand Lotによる

“Le Haikai”なる論文が面白い。江戸時代以来の日本の俳諧の紹介にはじまり、その影響を受けたフランス短詩運動の評論に及ぶものであるが、虚子の渡仏（昭和11年）を機会に虚子庵に架蔵されることとなった一書と思われ、この時期のフランス詩壇に Haikai 派なる一派の在ったことを知る好資料といえよう。

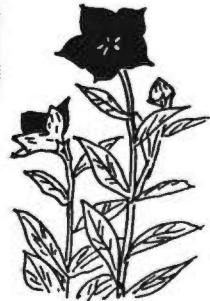
『はれの日』・『古庵り』（明治28年稿）——これらは寄託資料中のものである。明治28年、日清の役従軍中に大喀血をみた子規は神戸病院、須磨保養院に大患を養っていたが、その病床に届けられた俳句会稿（東京で催されたもので、虚子、碧梧桐、鳴雪らが一座している）がこれらである。子規はこれらに朱筆をもって多くの批点、添削を試みているが、中には漢字の字体の誤りを指摘・訂正している箇所もあって面白い。

上述の如く、本文庫の蔵書、寄託資料には虚子及び近代俳句を研究する上で不可欠の資料も多く含まれているが、整理研究を進めて行く上での困難も少くない。今後とも多くの方々の御理解と御支援を賜りたい。

（志木高校教諭）



医学情報センターの学外サービスについて



大澤充
(医学情報センター副所長)

はじめに

医学情報センターの活動は、その前身である北里記念医学図書館の開設が昭和12年(’37)11月であるから、既に40年以上の歳月を経ている。この40年

に及ぶ活動から、わが国のほかの医学図書館の活動と際立って異なる特長を挙げることが出来るとすれば、それは発足以来一貫して、学内の利用者に対するサービスばかりではなく、広く医学研究者一般に対しても、積極的にサービスを提供しつづけて来たことであろう。

発足当初における北里記念医学図書館の設立趣意書には、「……医学図書館の社会に有用なる敢て言を要せず、只我国未だ之を見ざるを遺憾とするのみ。医科大学、医学研究所等には夫々附属図書室あらんも何れも一部門的にして医学図書館と称するに足るものなし、又一般図書館に在りては医学方面の資料概して貧弱にして攻学の徒の頗る不便とする所なり、若し帝都に完備せる医学図書館ありて社会の利用に供せられしか、本邦医学文化発達上寄与する所蓋し鮮少なからざるべきを疑はず。⁽¹⁾」として、公開を原則とした、医学専門図書館設立の志向が明記されている。

一般に、図書館における利用者に直接関連する主要業務の第一は、図書・資料の供覧を目的とする「閲覧」・「館外貸出」・「図書館相互貸借」ならびに「文献複写」の諸業務であり、第二は、図書・資料に関連する情報提供を目的とする、「文献照会」・「所在調査」・「事項調査」・「利用指導」ならびに「文献調査」などの参考調査業務である。このような基本的図書館業務のうちで、北里記念

医学図書館(以下“医学図書館”と略す)において、特に義塾在籍者に限定して行なわれていたサービスは「館外貸出」業務だけであり、その外の諸業務は、学外利用者に対しても、学内者同様に提供されていた。

以下に、こうした公開性を基本姿勢として、常にわが国の医学図書館界の中心的な役割と先駆的な活動を展開してきた、医学情報センターの活動の経緯を、具体的な事例を挙げて紹介し、あわせて同センターの現状を概観して行きたい。

第1表 文献複写件数統計

年 度	利 用 区 别		年 度 别 合計(件)	前年度比 (%)
	学内(件)	学外(件)		
33(’58)	1,870	3,018	4,888	—
34(’59)	2,283	4,204	6,487	32.7
35(’60)	2,577	4,354	6,931	6.8
36(’61)	3,148	4,569	7,717	11.3
37(’62)	5,545	6,622	12,167	57.7
38(’63)	8,877	11,854	20,731	70.4
39(’64)	15,113	17,343	32,456	56.6
40(’65)	16,573	22,909	39,482	21.6
41(’66)	21,553	33,108	54,661	38.4
42(’67)	29,981	41,338	71,319	30.5
43(’68)	40,540	54,487	95,027	33.2
44(’69)	39,893	59,922	99,815	5.0
45(’70)	41,376	83,571	124,947	25.2
46(’71)	41,435	107,997	149,432	19.6
47(’72)	42,035	170,867	212,902	42.5
48(’73)	52,909	155,333	208,242	—2.2
49(’74)	49,825	18,474	68,299	-67.2
50(’75)	54,322	24,385	78,707	15.2
51(’76)	56,326	32,754	89,080	13.2
52(’77)	50,410	33,736	84,146	—5.5
総 合 計	576,591	890,845	1,467,436	

1 文献複写サービス

1960年代初めからの電子式複写機の普及は、医学図書館の基本的諸業務に大きな影響を与えていた。特に、その即時的な複写機能は、閲覧・貸出業務の代替手段として絶大な効果を発揮している。例えば、昭和52年度(77)におけるわが国の医学図書館(83館)の図書・資料の館外貸出総数は、136万冊であったのに対して、複写による文献提供総計は、163万件と複写件数が上回っている。⁽²⁾

第1表は、過去20年間(58~77)の“医学図書館”における複写による文献提供の実績集計表(件数)である。この資料により“医学図書館”的文献複写について大略下記のことが言えるであろう。

①過去20年間に総計146万件以上の文献複写を提供した。内訳としては、学内に対して57万件、学外に対して89万件であり、全体に対する学外への提供割合は64%に及んでいる。②学外への文献複写は、'73年まで、恒常的に学内利用を上回っている。③また、過去15年間(58~72)の文献複写サービスの成長率は、年度平均で30%の急成長を示している。④特に、学外に対する文献複写は、'72年には対学内複写の2倍、'71年には2.6倍、'73年には4倍という驚異的な増加を示している。⑤'74以降の学外に対する文献複写サービスは、図書館相互貸借ならびに個人的利用に限定されたので、緩慢な成長に止まっている。⑥ちなみに、'77年度の“医学情報センター”的文献複写件数(84,146件)は、わが国の医学図書館(83館)の1館当たり総平均(19,015件)⁽²⁾の4.4倍に達している。

2 相互貸借活動

わが国の医学図書館の間では、早くから「相互貸借規約」(昭和5年)を作ったり、「医科大学共同雑誌目録」(昭和6年)を刊行して、蔵書資料の不足を融通し合って、利用要求に積極的に応えるための制度が確立されている。

日本医学図書館協会加盟館統計によれば、昭和52年度のわが国の医学図書館(87館)の相互貸借総件数は、44万件を超えていた。⁽²⁾ このような医学図書館のネットワーク活動は、国立医学図書館

のような中央機関を持たないわが国では、急速に増大し、多様化している情報需要に対応する、いわば唯一の防衛手段であると言える。

同時に、この制度の加盟館各館の相互貸借業務処理件数は、それぞれの図書館の相対的なレベルを数字的に示すパロメーターであるとも言える。

第2表は、“医学図書館”が過去20年にわたって、主として日本医学図書館協会加盟校の医学図書館との間に行った、相互貸借業務の処理件数による集計表である。また第1図は、相互貸借貸出件数について、“医学図書館”的処理件数と全国の医学図書館の1館当たりの総平均値ならびに相互貸借集中図書館11館の平均値の推移を示したものである。⁽³⁾ これらの資料により“医学図書館”的相互貸借活動について大略下記のことが言えるであろう。

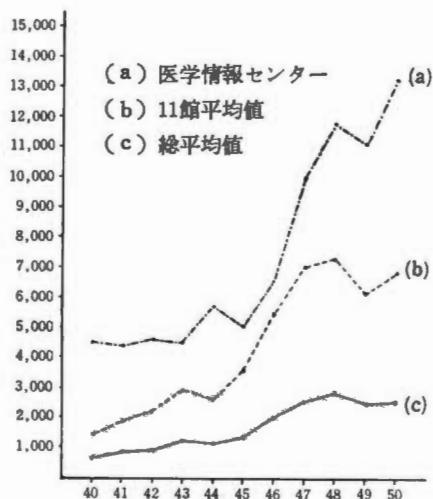
①相互貸借業務は20年前の約6倍に増加している。②学外図書館への貸出は常に学外図書館から

第2表 相互貸借統計(処理件数)

年度	学外への 貸出し(件)	学内への 借り入れ(件)	合計 (件)	前年度比 (%)
33 ('58)	1,529	964	2,493	
34 ('59)	1,707	873	2,580	3.5
35 ('60)	1,699	642	2,341	- 9.2
36 ('61)	1,710	598	2,308	- 1.4
37 ('62)	2,216	949	3,165	37.1
38 ('63)	3,443	714	4,157	31.3
39 ('64)	4,248	952	5,200	25.0
40 ('65)	4,546	1,277	5,823	11.9
41 ('66)	4,391	2,043*	6,434	10.4
42 ('67)	4,643	2,532	7,175	11.5
43 ('68)	4,532	3,766	8,298	15.6
44 ('69)	5,730	4,059	9,789	17.9
45 ('70)	5,064	3,457	8,521	-12.9
46 ('71)	6,559	5,378	11,937	40.0
47 ('72)	10,768	6,722	17,490	46.5
48 ('73)	11,751	8,240	19,991	14.3
49 ('74)	11,117	1,860**	12,977	-35.1
50 ('75)	13,288	2,145	15,433	18.9
51 ('76)	13,286	2,252	15,538	0.6
52 ('77)	12,705	2,507	15,212	- 2.1
53 ('78)	12,234	2,710	14,944	- 1.8

* '66~'73まで学内への借り入れの中に賛助会員(企業・団体)の借り入れ分を含む。

** '74以降学内利用のみに限定。



第1図 相互貸借件数の比較

の借入を大きく上回っている。③文献複写サービスと同様に'72年と'73年に驚異的な急成長を示している。④特に最近5年間('74~'78)の学外図書館への貸出は借入(学内利用)の4.5倍以上を維持している。⑤“医学図書館”的過去における相互貸借処理件数は、わが国の医学図書館の全国平均を大きく上回って、常に最上位を占めている。⑥なお、'77年度の医学情報センターの相互貸借処理件数(15,212件)は、わが国の医学図書館(87館)の1館当たりの平均処理件数⁽²⁾(5,130件)のおよそ3倍である。

3 参考調査業務

わが国の医学分野の情報活動において、参考調査業務を正式な業務組織として開始したのは、“医学図書館”が最初であった。⁽⁴⁾ 第3表は、“医学図書館”において初めて参考調査業務が開始された、昭和34年('59)4月から昭和49年('74)3月までの15年間の参考調査処理件数の集計表である。この表の「一般参考業務」には、文献の所在個所の調査、書誌的事項の照合・確認、研究者・研究機関についての情報提供ならびに統計・データ類についての調査件数を集計している。また、「文献調査」には、依頼に応じて、特定主題の文献を検索し、文献リストを作成、提供する業務を集計している。この資料により、“医学図書館”

の参考調査業務について大略下記のことが言えるであろう。

①参考調査業務の処理件数は、'59年(1,076件)から'73年(5,093件)の15年内に4.7倍の増加を示している。②特に'70年以降は文献複写、相互貸借と同様に急増の傾向を見せており、③参考調査業務全体の約30%が学外向サービスであった。④特に文献調査については'69年以降学外向けサービスが増加し、'72年には、学内318件、学外395件と学内を上回っている。⑤ちなみに、わが国において文献調査を行っている医学図書館(66館)の'77年度の文献調査総件数は、16,066件であり、その一館当たりの平均は243件であるとされている。⁽²⁾この状況は、漸く“医学図書館”的'64年度の実績を若干上回ったことを示すのに留っている。

4 その他の情報活動

上記の参考調査業務の外に、“医学図書館”的業務統計に記録されている利用者に対する主要なサービス業務として「文献分析」と「翻訳サービス」がある。

(1)文献分析サービスは、特定の研究主題について関連文献を継続的に検出して、文献リストやパ

第3表 参考調査業務統計(処理件数)

年 度	一般参考業務(件)		文献調査(件)		年度別合計(件)	のび率%
	学 内	学 外	学 内	学 外		
34 ('59)	488	408	180	0	1,076	100
35 ('60)	578	352	138	0	1,068	99
36 ('61)	351	96	128	0	575	53
37 ('62)	927	143	165	0	1,235	115
38 ('63)	296	57	162	0	515	48
39 ('64)	303	108	194	* 18	623	58
40 ('65)	611	343	289	58	1,301	121
41 ('66)	1,252	373	338	56	2,019	188
42 ('67)	1,118	389	395	105	2,007	187
43 ('68)	441	434	388	145	1,408	131
44 ('69)	** 913		294	189	1,396	130
45 ('70)	3,088		265	185	3,538	329
46 ('71)	4,342		344	290	4,976	462
47 ('72)	3,856		318	395	4,569	425
48 ('73)	4,495		311	287	5,093	473
総 合 計	25,762		3,909	1,728	31,399	

* 昭和39年より学外に対する文献調査を始める。

** 昭和44年度より一般参考業務について利用者別(学内外)の集計が廃止される。

ンチカードに索引加工したり、文献集として編集出版したりして、定期的に提供するサービスである。「文献調査」が主として個人研究者向けのサービスであるのに対して、このサービスは研究グループや団体・企業を対象としている。'62年7月から開始されたプラスミン文献の調査を始めとして、胸腺研究、免疫測定法、甲状腺、胆汁酸、職業病、神経化学、生化学的診断法、消化性潰瘍、大脑疾患の各テーマに関する調査活動が組織的に行なわれている。なお、以上の10主題について、'65年から'73年までの9年間に検出された関連論文総数は、136,540点であった。

(2)翻訳サービス：'67年6月には医学文献の翻訳サービスが開始され、主として日本語医学論文の英文翻訳及び英・独・仏・露語論文の日本語訳が提供されている。なお、'68年から'71年の4年間の翻訳総数は、3,099件であり、学内に対するもの1,091件、学外に対するもの2,088件となっている。

この外の注目される継続的情報活動としては、①米国国立医学図書館の MEDLARS システムに対して、わが国の主要医学雑誌の論文を索引する作業('66年11月～) ②米国大気汚染技術情報センター(APTIC)に対して、わが国の大気汚染関係文献情報の提供('70年4月～) ③国際原子力情報システム(INIS)に対するわが国の放射線医学関係論文の網羅的な索引及び英文抄録作業('70年4月～)などの国際協力活動の展開があげられる。(4)(5)

おわりに

過去20年間の業務実績の推移から、医学情報センターの対社会的活動とその現状について大略下記のことが言えるであろう。

①文献複写を始め相互貸借、参考調査、文献分析、翻訳その他の情報サービス業務において、学外利用の成長率は全て学内利用を上回っている。

②しかし、学外利用の急速な成長によって、学内利用が停滞したことは少なく、むしろ着実な発展を示している。③'62年の即時の複写機の導入は、文献複写と相互貸借の急激な成長の端緒となっている。④特に、学外に対する文献複写サービ

スの数量的拡大は、その対価によって参考調査を始めとする文献情報活動の積極的な推進の経済的基盤となっている。⑤業務基盤の確立と共に、'64年からは学外に対する文献調査と文献分析の積極的な提供が開始され、更に翻訳サービスから国際的情報活動へと目覚ましい発展を示しながら1970年代をむかえている。⑥医学・医療情報需要の基調的変化に対応するために、単なる文献提供機能の拡充ではなく、より高度な情報活動をめざして、'72年には“財団法人国際医学情報センター”的発足があった。⑦この財団の発足に伴って、医学情報センターは、サービス提供の対価として収入になりうる殆んど全ての活動をうなぎしている。⑧現在の医学情報センターの対社会的活動は、相互貸借活動への協力と個人的外来者に対する閲覧や即時の参考調査の提供に限定されている。⑨過去20年の実績は医学図書館の活動が学内利用に限定されるべきでないことを示している。むしろ医学分野一般からの広範できびしい利用要請を積極的に受止める姿勢なしには、学内からの要請にも的確な対応は望めない。⑩医学情報センターは、施設、資料面での深刻な限界状況に直面しているばかりでなく、その存在の基本姿勢にかかる困難な状況に遭遇しながら、1980年代を迎えようとしていることも極めて確かな現実であると言えるであろう。

- (1) “慶應義塾百年史” 中巻(後) 慶應義塾 昭和39年 p. 502—503.
- (2) “第49次日本医学図書館協会加盟館統計” (昭和52年4月—昭和53年3月) 日本医学図書館協会 1978. p. 185—186.
- (3) 上田修一 “相互貸借のための中央図書館” *Library and Information Science* No. 15, p. 72 (1977)
- (4) 福留孝夫、天野善雄 “慶應義塾大学医学情報センター(北里記念医学図書館)の開設にあたって” *Library System*. vol. 10, No. 1, p. 6 (1971)
- (5) 津田良成 “医学情報センターへの変貌” *Library and Information Science*, No. 8, p. 149 (1970)

トピックス

幼稚舎の“図書室を中心とする新しい学校施設”

新しい施設の誕生 幼稚舎の“図書室を中心とする新しい学校施設”は、幼稚舎創立百年を記念して昭和51年9月に誕生した。この施設は、次のような基本的な要求を入れて設計された。

- (1) 多様な情報媒体の選択・利用を可能にする施設であること。
- (2) 従来の環境では実現できなかった様々な教授・学習活動を可能にする施設であること。
- (3) 舎内のほかの施設と一体となって機能するよう工夫された施設であること。

できあがった施設の概要は、次の通りである。これらの施設の総称はまだ正式には決まっていないが業務上必要なので、仮に「幼稚舎図書室」と称している。

本館(旧棟)	2階	列品室	134m ²
		(常設展示場・作業も可)	
		高学年室	67m ²
		(普通教室・多目的利用)	
		低学年室	90m ²
		(舞台あり・多目的利用)	
記念棟(新棟)	2階	児童図書室	500m ²
		(読書・検索・活動の場)	
	3階	教員図書室	486m ²
		(教員研究室・教材置場)	
	4階	書庫	240m ²
		(特別文庫など・閉架式)	

施設は生きている 使い始めて3年が経過しようとする今日、およそ790人の幼稚舎生と30人の教員のすべてが、新しい施設と何らかの結びつきを持っている。ある時は個人的に、ある時は集団の一員として。また、教科との結びつきについても、一様にとは言えないが、それぞれと連携している。教科外の活動についても同様である。

新しい施設の営みを端的に紹介することは、たいへん難しいことである。まさに、施設は生きているのである。常に複数の児童と教員によって利用されている。課題は、次々に持ち込まれてくる。利用のしかたについても、日々新しい工夫が生みだされている。施設からの働きかけもいろいろな形態がとられ、対象も全体・特定学年・特定集団・個々と様々である。

機能は日々にます 新しい施設の機能を総括すると、次のようになる。

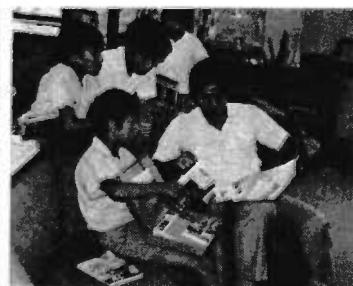
- (1) 教授・学習活動を援助する。
 - (2) 児童の自主的な活動を援助する。
 - (3) 情報を提供し、児童と教員に直接働きかける。
 - (4) 教員の研究活動を援助し、作業を協同する。
- 第1にとりあげた「教授・学習活動を援助する」ことは、いわゆる学校図書館の主務とも言うべきものである。その内容は、資料・教材・教具・その他の用品・消耗品などの物の提供に始まり、次に、活



絵本を楽しむ低学年生



児童が企画したかるた



旅の計画をみていただく



作業する子・展示を見る子



個別に学習がすすめられる

動の場の提供がある。更に、児童の管理・指導及び資料検索、教材準備といった労力の提供がある。

第2の機能は、「児童の自主的な活動を援助する」ことである。休み時間や放課後など自由に使える時間に行われる活動、つまり、自由研究・読書・話し合い・工作・その他の作業などに必要な物と場所を提供することである。勿論、児童の相談に応じる場合もある。

第3の機能は、「児童と教員に直接働きかける」ことであるが、それには、読書を含めての利用指導・各種の情報の提供・利用にかかる広報活動・展示や催物の実施などがある。

第4の「教員の研究活動を援助し、作業を協同する」ということは、要するに、求めに応じて知恵と労力を提供するということである。その内容は、情報蒐集や教材の研究・開発が主なものである。しかし、現在は、情報蒐集はある程度できるが、教材の研究・開発については、その場で知恵を提供するかもしくは、小規模なものを若干引受けているにすぎない。

かくれた機能 これは第1の教授・学習活動の援

助にかかわることであるが、もうひとつ、かくれた機能を紹介しておく。

教室以外の施設も使え、その上施設に児童を管理する者がいるということで、教室の学習形態はある程度まで変えられるようになった。しかし、施設の管理者は、ふつう不特定多数の児童を相手にすることになるから、変えられるといっても自と限界がある。例えば、教授（又は援助）を必要とする学習集団は、常にひとつしか作れない。課題によっては、学級をいくつかの集団に分けて学習を進めた方がよい場合があるにもかかわらず、これまでの学級の教科担当者と施設の管理者だけでは、そうした学習集団をふやすことはできない。そこで、施設の要員を特定集団の相手をするようにしくむと、事情は変わってくる。すでに、いくつかの試みはなされている。これが、かくれた機能である。

明日のために 現在施設の専従者は、教員1名と司書2名である。当然のことながら、できることは限られている。しかし、効用は日々にます。これにどう対処するか。大きな課題である。

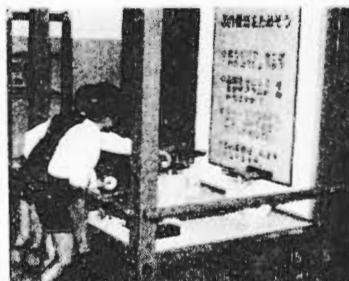
（幼稚舎教諭 高橋元夫）



次に読む本をさがす



机は大きい方がいい



通りがかりにちょっと

三田文学ライブラリー

—その生い立ちから今日まで—



数ある特別文庫の一つで、その名が示す如く三田文学に關係のある三田の作家文人の著書・原稿・書簡ハガキ・日記・墨蹟・写真その他の資料を幅広く蒐集し、それに三田文学をはじめ三田系の同人雑誌をも加えた、いわば日本の近代文学史上に開花した三田文人の華麗な足跡をあとづけ得ることを目的に創設されたものである。この計画は昭和41年、当時文学部教授で図書館長であった佐藤朔氏の努力のもとに、7月に三田文学ライブラリー設立趣意書の作成発起人の会合などを見、8月2日の常務会の議を経て発足したもので、常務会決裁の指示事項に「図書館の業務として久保田基〔資〕金を中心に運営のこと」とある。ここに久保田資金の名が見えるが、これは久保田万太郎記念資金委員会が作家久保田万太郎氏の寄付による著作権の果実をもって行う記念事業の一環として、久保田万太郎記念講座の設定や出版事業等と並び三田文学ライブラリーを育成しようとする意図に基づいたものである。当時永年休刊していた三田文学の復刊が予定されるなど、塾内に盛上った日本近代文学研究の運動の一環として行われたものと解される。資金導入はライブラリー創設を唱導した佐藤朔氏の努力がみのったもので、同氏は図書館長であると共に久保田記念資金委員会の運営委員でもあったからより便宜したと思われる。

さてライブラリーが創設されるに至るまではそれ以前に色々と曲折があった模様であり、少し

石川博道

(三田情報センター副所長)

くそれについてふれてみたい。

昭和37年11月6日に久保田万太郎氏と義塾の間で、氏の没後著作権一切を寄贈する旨の話が出され、すぐ著作権贈与についての契約が取交わされたが、その条件の中で同氏の「全著作物並びに諸資料の整理保管とその公開」その他があり、義塾側の対応としては久保田万太郎記念文庫の設立等が具体的に考えられていたことがある。

これは推測ではあるが、その後時代の流れと共に周囲の状況も変化し、人々の考え方もより現実的になるにつれ、久保田文庫の構想は或は同氏の全著作物並びに諸資料を中核とするより広い範囲の三田文学関係の作家を対象とするコレクション作りに昇華し、近代日本文学の資料蒐集のそれは範囲を限定し、より純粹な形で三田文人の枠にとどめる方向に変化して来たのではあるまいか、昭和37年から42年にかけては日本近代文学館の設立や、東京都近代文学博物館開館といった風に、近代文学研究熱のたかまりと共に資料蒐集が盛んになり始めた時代でもあったから、結果的にみれば義塾が三田文学関係の文人資料の蒐集に独自の道を選んだことは極めて聰明であったし、慶應としての特徴を打出した点でより適切であったと思われる。もっとも三田文学関係の作家の文庫を作ろうとしたことは、第二次世界大戦末期に三田の作家の蔵書が図書館に寄贈された時にも目論まれたことがあったから、三田文学ライブラリーの創設は図書館にとっていわばかねてからの宿望であったといつてもよい。かくて昭和41年久保田文庫構想をも含め三田文学ライブラリーは実現した。

さてその蒐集対象は塾出身の文筆家で当時芸術

院会員の堀口大学・岩田豊雄(獅子文六)・西脇順三郎・高橋誠一郎の4氏のほか物故作家43名と三田系同人雑誌にしほり、これを第1期としとり敢えず昭和42年3月を一応の目標に蒐集を始めた。蒐集に当っては効率を高めるためにも出来るだけ多くの義塾関係者にうったえ、寄贈もしくは寄託による御協力を願いながら、久保田資金100万円をもとに資料の購入に努めた。三田文学ライブラリー蔵本は図書館のそれと違い、オリジナルな感触をも尊ぶ立前からできるだけ初版本で保存の優れた美しいものを選んだ。勿論自筆草稿書簡もしくは墨蹟類の如く直接肌でその作家に接し得られる資料を蒐集の眼目においたことは言うまでもない。この結果42年始めまで思いのほかの収集を見ることができ、その成果は42年1月31日現在のものが図書館の機関誌「八角塔」1号に報告され、45名453点を計上している。その後42年11月に開かれた発起人会では、(1)援助資金100万円の追加(後に更に100万円計300万円の総額となった)、(2)最近物故された作家を対象に加える。(3)現在活躍している作家にも追々その範囲をひろげるなど第2期以降の方針が申合はされたが、それは今日まで踏襲されその線で運営されて来ている。

茲に三田文学ライブラリーの設置場所として図書館の八角塔1~3層を選んだが、書架も乏しく、施設設備の貧弱さは何とも致しがたい。よって42年9月に館費705,000円を投じて改善工事に当り、檻材の豪華な書棚・絨たん・ブラインド・螢光灯暖房機器の補修取替、そして全階の壁面の塗装替えと思い切った手を打った。けだし義塾の文化財たるべきものの収納と公開に備えるための配慮であった。

資料の利用については公開を立前とするものの、内容の貴重性と原装保存の観点から取扱いは厳重にし、研究者といえども紹介者有る者に限り閲覧させる許可制を採用し、館外貸出は行わないシステムにしている。

三田文学ライブラリーのコレクションの特色については今更言うまでもないが、ただ久保田万太郎氏の学恩に負う創設の事情からして、まず久保田関係資料の充実を計ることが大切であったが、

蒐集に当っては幸にして久保田万太郎氏と親しくその蒐集家でもあった木村梅藏氏から作品の単行書97点を得ることができ、その他の協力もあって殆んどの作品を網羅することができた。また自筆のものとしては原稿「あきくさばなし」46枚(戸板康二氏寄贈)、「万太郎句集1~5」62枚(大江良太郎氏寄贈)のほか、最後の句帳(安住敦氏寄贈)であるとか、色紙短冊若干の蒐集を見ているが、珍らしいところで「わつぶる」「文芸夜話」の自作朗読のテープ(小野栄一氏寄贈)も架蔵されている。なお文学ライブラリーのコレクションには三田文人に関する絵画彫刻など美術資料も対象に含まれているが、目下のところ寄贈にあづかったものでは、肖像画として「水上瀧太郎」色紙、鏑木清方画、同色紙青木繁次郎画(いづれも阿部優蔵氏)、「小泉信三」仙波均平画(小泉富子氏)、「沢木四方吉」山本鼎画(沢木みね子氏)、「折口信夫」伊原宇三郎画(同氏)のあることをお伝えしておく。寄贈資料のうちまとったものに故水上瀧太郎氏の原稿8種を含む25点(阿部優蔵氏)、故和木清三郎氏蔵の和木氏宛サイン入りの献呈本など379点余(上田恒氏)がある。和木氏のものの内容はすべてが三田文人のものではないが貴重な資料であることに変りはない。ここで昭和49年三田文学ライブラリーに保管管理を托された虚子文庫についてふれておく。虚子文庫は俳人高浜虚子が生前起居された鎌倉市原ノ台の虚子庵に収蔵されていた俳句関係資料の中、嗣子高浜年尾氏のご好意により義塾に寄贈された図書等598点と、同じく寄託された句稿類からなるもので、図書については文学部国文学研究会による「虚子文庫目録」(54年4月1日刊)がすでに作られているがいづれも虚子研究の根本資料として極めて貴重なものとされている。

この三田文学ライブラリーの目録については昭和42年から44年に過去3回発行され、102名、1,451点の蒐集を記録しているが、現在その後の増加分についてみると、

単行書 第1期の文人 42名 229点

第2期以降 95名 351点

原稿 32名 52点

書簡類 29名 60点
色紙短冊 10名 13点
写真肖像 23名 23点
伝記・研究書・追悼号など 25名 49点
雑誌の復刻版 5点
同人雑誌新収タイトル数 4
その他 (昭和54年3月末現在)

を計上し目録作成中である。ただこの目録に収録したものの中には三田文学ライブラリーのコレクションとして蒐集対象外と思われる人々のものも含まれているが、寄贈のご好意に対し礼をばす意味もあって収録したが、純粹に「三田文学」に関係のある作家文人に限り蒐集する原則を再確認するならば、今後も増加を見るであろうこの種の資料に対し、その蒐集の可否、取扱いのあり方、目録掲載の是非など考えるべきことも多く、やがては慎重に選別し直す必要があるようにも思う。

* * *

さらに三田文学ライブラリーの今後の問題として、このライブラリーが図書館の他の特別文庫とことなり、久保田万太郎記念資金委員会からの資金援助によって成立した経緯があり、管理運営の責任は三田情報センターにあるものの、コレクションの蒐集は委員会の援助資金に依存し、今後も継続されてゆく性格のものであるから与えられた資金の枠を無視することは出来がたい。いきおい委員会のライブラリーに対する援助の在り方が大きく影響することとなるが、コレクションがある程度充実して来ていることに見合って、金額の面では同委員会が運営する記念事業の他の部門への支出とのからみもあり、従来の線を期待することはこの際再考すべきことかも知れない。ただコレクション蒐集に今後大きな資金需要を来たす事態でもあれば、久保田記念資金委員会の意向を尊重しつつ場合により三田情報センターはそれなりの協力を実行する必要が出て来るやにも思われる。

新図書館の建設設計画の進行につれやがては今の図書館が旧図書館として現在と違った内容をもつことが予想されるが、三田文学ライブラリーの処遇については他の特別文庫と共に未だあきらかではない。できることなら三田文学ライブラリーの

生誕にゆかりのある、そして義塾の学問の伝統を象徴する八角塔を中心にライブラリーの施設を確保することが望ましいと思うが如何なものであろう。新図書館建設を機に三田文学ライブラリーの名にふさわしい施設の拡充が大切である。

私は三つの願いをもつてゐる。

- (1) 三田文学ライブラリーに専任者を置きたい。
担当者は所蔵資料に明るく書誌的研究に興味をもち、資料の紹介展示その他利用者への情報サービスも可能な専門職として適性ある有能な人物たること、併し自己研修により上記のレベルに到達しうる努力家を養成することをも含む。
- (2) 日本近代文学の学究が最近塾内に育ち研究者も多く、三田文学ライブラリーのイメージにふさわしい優雅で洗練なラウンジの如き施設をつくりたい。
- (3) 日本近代文学館その他既存のライブラリーに遜色のない充実した三田文人の資料館たらしめたい。それには自筆ものをもっと多く集める必要がある。

終りに一言、私はこの文章の始めの部分で久保田万太郎記念資金委員会が記念事業として、久保田記念講座の開設や、三田文人関係の出版事業を行っていることに触れたが、三田文学ライブラリーという名称はこれらの出版事業にも大きく役に立っている。このユニークで気品があり気の利いた名前は、まさに慶應のイメージを高めるに適している。昭和44年の「回想の石丸重治」から今春の「回想の厨川文夫」に至る一連の刊行物が、三田文学ライブラリーという名を通じ義塾の声価を高め、三田の文運に貢献したことは顕著である。私はこれによって文庫としての三田文学ライブラリーの一層の充実がもたらされることを切に祈るものである。

* * *

最後に三田文学ライブラリーの創設と維持発展に尽力された佐藤朔氏及び久保田記念資金委員会の方々に深甚の敬意を表すると共に、コレクションの蒐集に銳意努力され整理保存等基礎づくりに苦労された前図書館副館長伊東弥之助氏に対し衷心から謝辞を呈したく思う。

OCLC の半年間

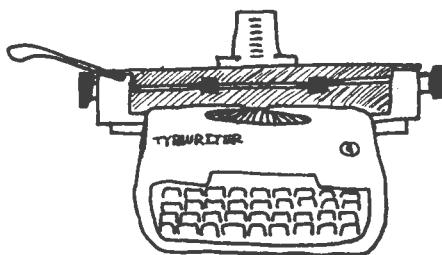
渡 部 滿 彦

電算機施設部システム課のM君は、14歳で故国イラクに両親を残し、3歳下の妹とアメリカの高校にやってきた。オハイオの工科大学数学科卒業後、昨年7月 OCLC, Inc. に就職し上記の課に配属された（配属という言葉は正確ではない。雇用側は職種と年俸を明記し、応募者もそれを納得して受験するから）。

計算機施設には最大の配慮がなされており、莫大な保険が掛けられていることは勿論、施設への出入はカラー写真貼付の磁気 ID カードを出入口横の小穴に入れ、ロックを解除した後に行なわれる。これを忘ると入るのに大変な苦労を要するという訳で、窓一

つないシステム課の一室で与えられたノルマを消化するのに精一杯のシステム プログラマ(バックエンド データベース プロセッサ プロジェクト完成予定日を一ヶ月以上も超過しているために皆イライラしており、私はとりつくしまがない)の中で孤軍奮闘気味の私に、M君は「君は日本人か」と話し掛けってきた。大学時代の友人で「鳥取君」という日本人留学生が数学が優秀な上に勤勉な人間であったということを説明し、日本人はアメリカ人より優れないと強調、アメリカが嫌いだと言った。彼はアメリカ国籍を有しておらず、彼の妻もドイツ国籍のドイツ人であった。

これを契機に昼はファースト・フード店に一諸に出たり、プログラムがつかえると(TANDEM16のコンパイラ言語TAL-PL/1的性質を有している)彼に相談した。「M,君は何故アメリカが嫌いなのだ。アメリカで



教育を受けアメリカで就職しているのに！」、「皆孤立して、冷やかで家族さえ信用してない。ボクのような無国籍者には目に見えない差別がある」、「じゃイラクへ帰ればいいじゃないか」、故国はいい国だ。が政情が不安定だし、生活水準が低い。日本で生活したいが、日本にボクを雇ってくれる計算機会社はあるだろうか？」、「日本は日本人だけの homogeneous 社会だから、永住を覚悟する外国人にはアメリカ社会よりも厳しい面がボクはあると思う、確信はないが」。

毎水・土曜にOSUの学生と小鷹道場で剣道をやった。ミシガン大との親善試合で知り合ったメキシコからMSUに来ているO君も

アメリカに好意を抱いていないという。彼ら外国人にとってアメリカは狭き社会で、種々不便なことが多いう。

ひと頃、日本でモーレツという言葉が流行した。がアメリカ社会の持つモーレツさは私の想像以上

のものであった。藤原正彦著「若き数学者のアメリカ」はその辺の事情を伝えてくれるが、そこに登場する数学者達の競争を押抜けたのがアメリカ社会かも知れない。OCLC, Inc.の人達は仕事が引けてから同僚と赤ちようんで一杯、というようなことはやらない代りに、仕事ではセッサタクマしている。OCLCシステムは狎れ合わない、このような社会だから成就したのだろうか。

昨年6月から半年間OCLCと関連機関の調査ということで、米国を中心とする海外生活の機会を得た。短期ではあったが、大袈裟な言い方だが私の人生観に大きな示唆を与えてくれた。M君もO君もその差別がどのようなものか具体的に語らなかったが、米国籍を持つ人々にさえ厳しい社会で、彼らの成功を期待したい。

(医学情報センター)

“Beilstein”について

木下光博
(工学部教授／応用化学)



KULIC編集係から“Beilsteins Handbuch der Organischen Chemie”について何か書くように依頼されて引き受けてしまったのは、このハンドブックが私にとって懐かしい本であり、最近 Beilstein がどのように利用されているか、また将来はどうであろうかということに关心があったからである。Beilstein の特徴や利用法についてはすでに優れた刊行物¹⁾がある。私はこれらとあまり重複しないように、私が Beilstein をどのように使ったか、また Beilstein についてどう考えているかを書いてみることも依頼の趣旨に添うのではないかと考えた。

私は1947年11月から1950年12月まで当時志木にあった応用化学科の分室で有機合成の研究をしていた。この分室は故松永安左衛門翁により慶應義塾に寄付された旧財団法人東邦科学産業研究所の建物の中の有機化学実験室であって、工学部が溝の口から小金井へ移転するまでの間使用していたものである。かなり広い実験室の壁の書棚に Beilstein の第4版主編27巻、別冊2巻、索引2巻と第1増補編数巻が戦時中の翻刻版で揃っていた（これは現在矢上台にある）。戦後まもない頃で、日吉で戦災にあった工学部には文献雑誌のバックナンバー、便覧類など大変不足していた。戦後の新しい文献のうち Chemical Abstracts やアメリカの雑誌は日比谷のCIE図書館でどうにか見ることは出来た。しかし試薬類がなかった。われわれは薬品倉庫から原料として使えそうな薬品を探して来ては、これから必要な試薬を作ること

を考えなければならなかった。ある化合物の合成経路を考えるとすると、出発原料は勿論倉庫になければならなかつたし、各ステップで必要な試薬は簡単なものでも自分で合成あるいは精製しなければならなかつた。溶媒類もみな不純であつて蒸留しても、きれいにならないもののが多かったので精製法の検討が必要であった。これらの作業は戦時中大学あまり実験が出来なかつた私達にとってはむしろよい勉強になった。このような多くの試薬調製実験で、わざわざ遠くまで文献を見に行かなくても、その製法 (Darstellung) や精確な化学的、物理的性質を実験室で教えてくれたのが Beilsteins Handbuch であった。私にとって Beilstein は単なる便覧というより、文献参考書であり教科書であった。

われわれの学生時代の有機化学の講義では化合物名はすべてドイツ語で教わった。化学、薬学、医学の学生の中にはドイツ語で化合物名を言えるということに一種の優越感を持つものもいたくらいであり、Beilstein をドイツ語で読むことは苦痛というより、よろこびであったかも知れない。私は卒業研究を東京工業試験所で半年間行なつたが、試験所の完備した図書室で学術文献に関する知識を十分に得ていたので、志木分室で Beilstein を見たときの喜びは格別であった。かくして私は自然に Beilstein に親しみ、頻繁に利用することになったのである。上述のような志木分室の状態であったので、私は普通の有機化合物の製法や性質を調べるために Beilstein を十分に利用した。このハンドブックは分析的に純粋な既知の有機化合物をその由来、物性、化学的性質、製造法等を

完全な文献調査にもとづく短い記述をもって組織的順序に配列したものである。基本的で重要な有機化合物は1920年頃までに大体報告されており、これらの中の主なものの物理的性質は、例えは Lange の *Handbook of Chemistry* にも表として載っているが、その表には Beilstein の巻数が付記されているのでこれから Beilstein を調べることも出来るのである。しかし普通の化合物を Beilstein で調べるには、主編 (Hauptwerk) の事項総索引 (General-Sachregister) で化合物の名前 (ドイツ語、慣用名でもよい) から所在の巻数 (これは主編、増補編に共通) と頁数を知るのが便利である。巻数だけわかれば、その巻の事項索引から見つけることが出来る。この初步的な方法は、有機化学を学んでいる学生が、教わった基本的な化合物 (たいてい名前を知っていなければならない) についてもっと詳しく調べたいときに試してみると、殆んど主編のみで目的を達することが出来、さらに増補編まで調べて行けば、主編では決っていなかった立体化学などが明らかになって大きな満足が得られる筈である。しかし一般的には、化合物が載っている巻数をその構造から検索することが出来るのが Beilstein の独特的のシステムである。このシステムを使いこなすには少し練習がいる。

これについて述べる前に、このハンドブックの第3版までの編者である、Friedrich Konrad Beilstein (1838—1906) とハンドブックの歴史について少し述べておきたい。Beilstein は St. Petersburg (現レニングラード) でドイツ人の両親の長男として生れた。1853年15歳で単身ドイツに留学、Heiderberg, München, Paris, Göttingen 大学で Bunsen, Liebig, Würtz, Wöhler に学び、Kékule からは大きな影響を受けた。1860年 Göttingen 大学で教授資格を得、Privatdozent として有機化学を講義し、1865年27歳で員外教授となつたが、翌年突然 Hanover 政府に辞表を出して故郷 St. Petersburg に帰り、同帝国工学研究所の教授となつた。彼はその後30年間この地位にあった。始めの7年間は Göttingen 時代のように新しい実験研究に精を出したが、1874年頃から

研究活動が減り始め、2、3年後に全く止めてしまつた。E. Hjelt²⁾ の Beilstein 伝によれば、この時期に彼は本格的にハンドブックのための資料を集め、草稿を作り、さらに根気のいる編集の仕事に精を出すようになつてゐたのである。Hjeltによれば、Beilstein は当時のロシヤ帝国の大学における学術研究の精神的環境が、ドイツと比較して絶望的な状態にあったと考えていたようである。1880年にハンドブックの原稿は遂に完成し、1882年には Beilstein の初版 (2巻、2,200頁、化合物数15,000) は印刷されて世に出た。当時有機化学の分野で仕事をするものにとって、このような文献参考書がいかに渴望されていたかは、Beilstein の初版が短期間に売り尽されたことによって示された。新しい化合物の数はその間に急増して行く傾向にあり、新版の要望が強かった。彼は第2版にとりかかる前に、まず彼が独りで資料を集め、編集した初版の原稿の誤りについて大きな懸念を表明している。Beilstein はドイツ化学協会を通じ、また私信で広く同じ専門の人々に呼びかけて訂正を緊急に依頼した。これによって集まつた多くの訂正をもとにし、新しい文献をも調査して2、3章を完全に書き直し、第2版の出版へ進むことが出来た。1890年に第2版全3巻 (4,080頁) が完成された。続いて第3版全8巻 (増補編、第3版総索引を含む11,000頁) が1892—1906年に出版された。第3版の終る前に有機化合物の数は100万に達しており、Beilstein はこれまでのように個人で出版することは将来不可能であると知って、1895年ドイツ化学協会にその出版を委譲し、編集のみ1906年に彼が死ぬまで続けたのである。Beilstein が編集した第3版は今日は使われていない。今日あるのは第4版とその増補編である (矢上台に第IV増補編まで揃つてある)。この4版は旧版を大幅に改訂して1906—1910年に集められた資料を加えて出版される予定であったが、第一次世界大戦で遅れ、1918年にその第1巻がやっと現われた。2、3年のうちに4版の増補編が必要になり、1924年と1928年にそれぞれ1910—20年と1920—30年をカバーする補遺が出た。そして30年代の労働、経済面での困難が増加しつつあ

った1937年に4版主編(22,000頁)が完成し、翌年第Ⅰ増補編も完成した。第Ⅱ増補編出版の決定は第2次世界大戦に直面しながら行なわれている。空襲に対する防護設備のなかったベルリンのBeilstein事務所をBreslauの近くに移すことで資料を戦災から守り、1945年第Ⅱ増補編6巻が出た。戦争が終ったとき、ハンドブックの原稿カード、インデックスなどは連合軍に没収されたが焼失をまぬがれた。アメリカ軍やドイツの化学会社の好意で事務所が提供され、ドイツ化学協会や世界中からBeilstein復活に援助の手が差し延べられた。1951年に財団法人Beilstein有機化学文献研究所が設立された。現在同研究所では約100人のスタッフによって4版第Ⅳ増補編の編集が続けられている。

Beilsteinが彼のハンドブックの資料の収集を始めたのはGöttingen時代の1861年頃と思われる。最初は自分のための単なる覚え書程度であつたらしい。しかしBeilsteinが後になってその収集資料を化合物別に並べて整理しようと試みたことは当然考えられることである。彼はその整理をどのようにしたのであろうか。彼が百科事典や普通の化合物事典のような、ABC順に化合物を並べることをせずに、どうして現在のBeilsteinに見られるような有機化合物の構造にもとづく配列システムを採用したのであろうか。第一に考えられるのは、その当時の化合物命名法には多くの不備があったので命名上の困難をさけたことである。第二はBeilsteinのドイツ留学中、1858年にはKékuleとCouperが独立に炭素化合物中の原子の結合様式に関する極めて重要な提案をし、1865年にKékuleは有名なベンゼンの構造式を提出しており、ドイツでは化学者が世界で最初に炭素化合物の正しい構造の概念を持っていたのであって、Beilsteinもその概念を完全に理解していた1人であったであろう。

Beilsteinが彼のハンドブックに一つの新しいシステムを採用したことは、彼が有機化学に構造に基く一つの体系を作ることに成功したことであり、この意味でBeilsteins Handbuchは有機化学の一つの典型的な教科書であると言える。

Beilsteinのシステムでは有機化合物の化学構造が書ければ、その化合物の名前(種々の命名法がある)によらずに、その記載巻数、頁数が検索出来るのである。これは漢和辞典が本来、音や訓よりも絵画、部首からの索引システムであって、漢字が読みなくても正しく書ければ探し出すことが出来るのと似ている。

Beilsteinシステムにおいては、有機化合物の可能なすべての構造変化に対応する厳密な理論的組織化のために、その規則(定義)が複雑になることは避けられないことであった。Beilsteinではこの一連の規則のもとに、あらゆる炭素化合物の中のいかなる化合物(それが既知、未知のいずれであるを問わず)に対しても、ただ一つの確実な位置(場所)を指定することが出来る。

Beilsteinは毎年急激に増加する化合物と報文の数のために、全体としては第二次大戦中の遅れをまだ完全にとりもどしてはいない。それどころか新化合物の刊行の速度について行くことさえ次第に困難になって来ている。例えば今から9年前に、1929年からその年までに知られているすべての有機化合物をBeilsteinに収録するには約100巻が必要であると推定されていた。⁴⁾現在この100巻もまだ完成されていないのである。

* * *

- 1) E. H. Huntress, "A Brief Introduction to the Use of Beilsteins Handbuch der Organischen Chemie," Wiley, New York, 1938; O. A. Runquist, "Programmed Guide to Beilsteins Handbuch," Burgess, Minneapolis, 1966; O. Weissbach, "バイルシュタイン(Beilstein)の手引," Springer-Verlag, Berlin, Heiderberg, New York, 1975.
- 2) E. Hjelt, Ber. Dtsch. Chem. Ges. 40, 5041 (1907).
- 3) R. Adams, Chem. Engng. News 1956, 6310.
- 4) T. B. Hendrickson, D. J. Cram, and G. S. Hammond, "Organic Chemistry", p 1139, McGraw-Hill, 1970.

蔵書の年代別配架の背景

—日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の方向—



日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の建物としての歴史は早20年を経ており、既に老いが感じられるようであるが、そこを舞台とする利用者へのサービスは、年を経るごとにフレッシュで、魅力的なものとなるよう努力が積み重ねられている。

最近の動きとしては、当館の主たるサービス対象である教養課程の学生の性格をとらえ、そのための使い易い図書館づくりを目指しての一連の改裝計画があった。

サービス・カウンター、レファレンス・カウンターの同一フロア化、閲覧机、閲覧座席の増設など、1978年の新学期にスタートした種々の改裝については、既に *KULIC* 前号に天野前P.S.課長が報告しているが、これらの改裝に引き続いて1978年度中に実行に移された業務の中で、特に記しておきたいこととして、図書館蔵書の年代別配架がある。

この図書館蔵書の年代別配架とは、当館所蔵の一般単行書を、その出版年により区分し、1960年以前出版の図書を地下書庫に、1961年以降出版の図書を2階書庫に配架したことである。

当館は2つの書庫をもっているが、この両書庫が、「地下書庫」、「2階書庫」といった具合に、建物の上と下とにかけ離れて位置している。数年前より全面開架方式の図書館としているので、利用者はどちらの書庫にも自由に入り出しができるわけではあるが、書庫へのアクセスの容易さという点で、両者にはかなりの開きがあり、有効な利用が

関 洋

(日吉情報センターP・S課)

防げられる結果となっていた。2階書庫が、第1閲覧室と同じフロアであり、カウンター、目録に隣接しており、利用者は自然と書庫に導かれるのに対し、地下書庫は、この2階書庫の隅にある出入口を出て階段を数十段降りてやっとたどりつくといった具合である。

こういった事情への対応措置として考えられるのは、利用頻度の高い図書を利用の便のよい2階書庫に、利用頻度の低い図書を地下書庫に、と配架することだが、この区分を従来は主題別に行なっていた。図書はNDCにより分類されているが、社会科学、自然科学、文学といった利用の多い分野を中心に哲学、工学・技術、芸術の3分野を加えた計6分野の図書が2階書庫に、残りの総記、歴史、産業、語学の4分野の図書を地下書庫、と配架していた。2年前の利用調査では、2階書庫の図書が館外貸出図書の94%を占めており、主題の展開の不連続性などに異和感をもちらながらも、この主題別区分も、それなりの妥当性ありと受けとめ継承していた。

年代別配架案が、私見として当時の天野P.S.課長より出されたのは1977年度中のことであったが、その後P.S.課の議題として連絡会において継続的に討議され、平行して行なわれていた年代別図書利用調査の結果とともに、「藤山図書館蔵書の年代別配架について（案）」としてまとめられ、P.S.課の年度内実行業務案として提出され、決定をみたのは1978年6月であった。そしてこれに続く準備作業を経て、11月の三田祭の時期に本作業が行なわれた。

この配架方法の変更は、当館の蔵書の大半およそ8万冊の単行書、製本雑誌などの移動を必要とする大変大掛りな作業となったわけであるが、敢えて実施に踏みきった経緯など先の案文をふり返りながら、以下に述べておきたい。

従来の配架方法の問題点としていくつかの指摘がなされた。

「利用頻度の低い主題の図書をアクセスしにくい地下書庫に配架しているため、ますますその主題の図書の利用頻度を低くしている」

先に2階書庫の図書の利用頻度が高いことを述べ、それを従来の配架方法の理由づけのひとつとしていたが、これも一方ではこのような欠点をもっていた。ある時点で利用頻度の低かった主題の図書に対し、積極的に利用を促進することなく、切り捨てるかたちとなってしまっていたことは反省させられた。

「出版年の古い図書と新しい図書を混配しているため、書架の感じを暗く、魅力のないものにしている」

「同一主題の図書が多くなっているため簡単に全部を閲覧することを困難にし、それだけ有効な図書の発見を妨げている」

書架の与える印象といったことは、一見末梢的な問題のようであるが、利用者が図書館のイメージを形作る際にかなり大きな要素となっているものと思われる。既に自分の研究テーマをもち、そこで必要とされる特定の文献を求めて来館する利用者ならば、その文献が入手できるか否かがまず問題であり、目録をひき、請求記号が求められるならば、書架が古い図書、新しい図書が入りまじり、ずらりと並んでいる状態であったとしても、利用にさしたる障害となるわけではない。当館にもそういう利用者はいるが、限定された特定の文献を求めてではなく、ある特定主題の文献を何か、と求めて来館する利用者も多い。こういった利用者にとって、その特定の主題のもとに多くの

図書がずらり並んでいることは、それだけ選択の幅があることではあるが、それにも限度がある。

Up-to-dateな図書で満たされているならばまだよい。より適切な図書を選ぶ意欲も湧くかもしれないし、書店と同じ身近な存在と感じ図書館に通うことを楽しみしてくれるかもしれない。しかしこれが古色蒼然とした図書であったら、選択の意欲も減退するであろうし、図書館から足を遠のかせることになってしまふかもしれない。古色蒼然としているのは外見のことであって、内容は別かもしれないが、ノイズとして働いてしまうことが多いのではないだろうか。

年代別配架は、これらの問題点解決へのひとつ回答となるものであった。この方法により配架を行なうと次のようになる。

「利用頻度に関係なく全主題を均一の条件で閲覧することができる」

「アクセスしやすい2階書庫に新しい図書のみが配架されるならば、利用者にアトラクティブな印象を与えることができる」

出版年の新しい図書を2階書庫に配架するのには、無論その外見がアトラクティブであるからだけではない。その内容、資料的価値を考えてのことではなくてはならない。図書を、その時々に、その社会の要求に答えて、過去の学問の成果を踏まえて生まれてくるものとみるならば、新しい図書ほど役に立つはずであり、利用者の要求に答えるものであるということができる。実際にはそう評価できない新しい図書もあるし、古い図書で価値をもち続けるものも多いが、教養課程の学生を主たる利用者とし、基本学術書、基礎教養書を主たる蔵書とする当館では、新しい図書を優遇し、主たる情報源として構成していくのではないだろうか。年代別図書利用調査の結果を見てみると、1977年10月から翌1978年3月の6か月間に館外に貸し出された図書の90.4%が1960年以降の図書であった。

しかし、この年代別配架方法にも次のような問題点があった。

「文学作品など、資料の価値が年代にとらわれない分野のものも、出版年が古いというだけで地下書庫に収容されることになる」

「区分される年次の前後にまたがって出版されている全集などの継続出版物については、取扱いに工夫が必要となる」

文学作品などについて、その図書の出版年で区別することは確かに問題があり、この分野のみ別に扱うことも検討されたが、結局は全体の統一ということから、他の分野と同様に年代別配架とした。若干の危惧はあったのだが、結果として、特にトラブルはでてきていなかった。全集などの継続出版物の取扱いについては、当初「区分の年次にまたがって出版されているものは新しい方に統一する」とのルールに従って行なう予定であったが、準備作業の段階でこの区分年次にまたがる継続出版物の数が予想外に多く、2階書庫のスペース管理に影響することが判明したため、区分のためのルールを「古い方に統一（継続出版物の中に区分年次以前の出版のものが1冊でもあれば、全て地下書庫に配架）」と改め実施した。このため、ごく最近に出版されたものでも地下書庫に收められてしまうものがでてきてしまった。スペース管理の都合上いたしかたないが、残念に思われる点である。

なお、区分について、増刷、改訂版、複刻版については、原本の出版年にかかわらずそれぞれ増刷、改訂版、複刻版の出版年によった。これらの図書は、それぞれその時点での資料価値が再評価され、再生産されたものと考えることができる。

いくつかの問題点を残しながらも年代別配架方法の採用に踏みきったのには、もうひとつ大きな理由があった。それは、この藤山記念日吉図書館を、フレッシュな学生に対し、常に新鮮な、魅力的な資料を提供し続ける機関としてより積極的に

分野別（NDC）利用率（%）の推移

分野	地	哲	歴	社会科	自然科	工学	農	医	語	文	全
調査 年月日 〔配架方法〕	記	学	史	社会科	自然科	工学	農	医	語	文	全
1977-6-23 〔主権別配架〕	1.2 (11)	7.5 (66)	2.9 (26)	31.4 (295)	25.6 (226)	7.0 (62)	0.7 (6)	2.3 (20)	1.1 (10)	18.2 (161)	99%
1979-6-23 〔年代別配架〕	1.4 (19)	7.5 (102)	4.6 (62)	31.5 (431)	28.7 (393)	7.3 (100)	0.5 (7)	3.6 (69)	3.4 (47)	11.5 (158)	100%

（ ）は貸出冊数、＊は主権別配架時に置かれていたもの

働かせるために、この配架方法が効力を発揮するものであると考えられたことであった。

当館の新刊書の年間受入冊数を8,000冊とするところ、この9月に完成する予定の地下集密書架のスペース増加分を計算にいれたとしても、書庫はあと5年もたたないうちにいっぱいになってしまふ。この時迄に新図書館でも造られているならよいが、それは残念ながら望めないようである。この対策として利用されなくなっている図書の除籍が考えられている。保存図書館としての性格を負わされている大きな図書館では、除籍に消極的であろうが、当館では積極的に取り組んでいってよいことと思う。むしろ除籍を、当館の運用の基本方針のひとつに使えるぐらいの前向きの姿勢が必要であろう。それは単に書庫のスペースを確保するためにということだけではなく、当館を新陳代謝を図る生きた図書館として位置づけるためのものである。これは全面開架制を使い易い状態で維持していくためにも必要な処置と思われる。

除籍図書選定のルールはまだ決定していないが、除籍候補図書のピックアップに際して、その出版年を目安とすることが考えられる。

この時、書庫が年代別配架となっているならば、作業はかなり進めやすくなるはずである。

このように藤山記念日吉図書館のこれからの方針を検討した結果、年代別配架方式が是と認定されたのである。

付記： 地下集密書架完成後は地下書庫、2階書庫のスペース調整のため、年代別の区分年次は1965年に変更される予定である。

三田情報センターの小展示

石川 博道
(三田情報センター副所長)

カメラ愛好家の友人から道祖神をモチーフにした一連の習作を見せてもらった。一連のとけ道祖神の分布上最もよく知られている群馬から長野松本にかけて、比較的保存のよい神像の味い深いものを選んで撮影したもので極めて素朴で愛らしい感じの出ている見事な作品であった。それは見る者に道祖神への関心と愛情をたかめさせるものがあったが、同時に私は知的にある啓発されるものを見て早速図書館の書庫に道祖神についての文献を捜し始めた。それに柳田民俗学に見られる我々の祖先の習俗特に死者への対応のあり方が道祖神を祀るしきたりと、底辺において深く交っていると考えられ、俄かに興味を覚えたからであった。この「ものを見る興味」は或る日思いがけない機会に触発されるものである。蓋然的なものから確実なものへ実証を求めてゆく学問的探究が、興味を超えて行動を

律してゆくこの種の経験は誰しもが持つところであろう。今この個人の関係を図書館と利用者の関係に置き替えてみると、そこには知人が私に示した好意が啓発をもたらしたと同様な効果を、図書館は利用者に対し計画的に具体的に測定し顕現すべきであると考える。私はこの手段の一つとして展覧会の必要性を説き、その実施内容について前号に誌したが、今回これに類するものとして、スケールの小さくそれだけきめ細かく、興味への接近に力点を注ぐことを意図した「小展示」について、その過去にもたれた実績をここに紹介する。小展示は小規模であるけれども、テーマの選定がむづかしく、余りに専門にすぎたり特殊なものに片寄ったりする危険さも多い。ただ展覧会が極めて短期間の開催であるのに比べ、最短2週間の展示期間の持てることが利点である。研究者の協力も得てよりその成果を高めてゆくことができれば偉せだと思う。

(開催年月日、目録の有無、協力者 *印は福沢・塾史関係)

1. 咸臨丸* (35.5.9~21)
2. 日本の新聞 (35.5.23~6.4)
3. 大島圭介宛の手紙 (35.6.6~18)
4. 日本の発見 (35.6.20~7.2)
5. 絵巻物 (35.7.4~16)
6. 演説の初め* (35.7.18~30)
7. 広重三代 (35.8.1~13)
8. 明治の社会主義文献—新聞— (35.8.15~27)
9. 歌舞伎 (35.8.29~9.10)
10. 張合の法* (35.9.12~24)
11. アダムスミスの国富論 (35.9.26~10.8)
12. 小山内薰宛文士の手紙 (35.10.10~22)
13. 福沢先生と演劇* (35.10.24~11.5)
14. 蔵書印と蔵書票 (35.11.7~19)
15. 斯道文庫のコレクション (35.11.24~12.7)
16. 元老院の国憲案 (35.12.8~21)
17. 明治初期の塾生資料 (36.1.16~28)
18. 仏典の流れ (36.1.30~2.11)
19. 唐蘭船持渡鳥獸之図 (36.2.13~15)
20. 泉鏡花本の装釦と挿画 (36.4.10~22)
21. 江戸時代の甲冑図録 (36.4.24~5.8)

22. 初期慶應義塾の英学* (36. 5. 8~20) (38. 8. 5~31)
23. 日本煙草葉発達史 (36. 5. 22~6. 3)
24. 時及び時計 (36. 6. 5~17)
25. 朝鮮本 (36. 6. 19~7. 1)
26. 関所手形 (36. 7. 3~15)
27. インドネシアの文化 (36. 9. 11~30)
28. 洋学の伝統* (36. 10. 2~14)
29. 異類小説絵巻 (36. 10. 16~28)
30. 幕末明治初年のキリスト教の伝導とその排撃 (36. 10. 30~11. 11) (38. 9. 30~10. 19, 岩崎良三)
31. 西洋金石文 (36. 11. 13~12. 2)
32. 西洋風俗史 (36. 12. 4~16)
33. 洋服と慶應義塾* (37. 1. 16~27)
34. 森下岩楠 (37. 1. 29~2. 10)
35. 福翁自伝* (37. 4. 16~28)
36. 本の歴史—16世紀まで— (37. 4. 30~5. 12)
37. 近世初期の小説—御伽草子, 仮名草子, 浮世草子 (37. 5. 14~26) (38. 1. 27~2. 15, 武田勝蔵)
38. 山の本日本アルプスと本塾出身の登山家の著書を中心に (37. 5. 28~6. 9)
39. 鎌倉時代古文書 (37. 6. 11~23, 高橋正彦)
40. 三田に移った頃 (37. 8. 13~25)
41. 本草書から植物図鑑へ (37. 9. 3~15)
42. 西イリアンの風物 (37. 9. 17~29)
43. 初期日本の統計学 (37. 10. 1~13)
44. サイクリング (37. 10. 15~27)
45. 本塾文学部芸術学の系譜* (37. 10. 29~11. 10)
46. 幕末の瓦版・落旨 (37. 11. 12~12. 1)
47. 渡辺華山 (37. 12. 3~25)
48. 鏡花遺品 玄の玩具 (38. 1. 11~26)
49. 火事と消防 (38. 1. 28~2. 9)
50. 福沢先生の書入本* (38. 4. 15~5. 4)
51. 我国仏語書のはじまり (38. 5. 6~18, 原田芳郎)
52. 早慶戦* (38. 5. 20~6. 1)
53. 馬場辰猪・孤蝶兄弟 (38. 6. 3~15)
54. 昆虫 (38. 6. 17~29)
55. 塙近辺の史蹟名所 (38. 7. 22~8. 3)
56. 慶應義塾の生んだ詩人ヨネ野口 (38. 8. 5~31)
57. 塙附近の史蹟名所 (38. 9. 21~14)
58. 東南アジアの常識 (38. 9. 16~28)
59. 現代英米作家署名本 (38. 9. 30~10. 19, 岩崎良三)
60. 欧文による日本文化紹介 (38. 10. 21~11. 2)
61. 酒落本 (38. 11. 4~16)
62. 福沢先生と小学教科書* (38. 11. 4~16)
63. 小林小太郎の馬耳蘇氏記簿法 (38. 12. 9~21, 西川孝次郎)
64. 初春の遊戯 (39. 1. 13~25)
65. アメリカに於ける永井荷風 (39. 1. 27~2. 15, 武田勝蔵)
66. 日本とシェクスピア (39. 4. 13~5. 2)
67. 近代日本の絞首台 (39. 5. 4~16, 手塚豊)
68. 日本の勲章 (39. 5. 18~30)
69. 近世芸能資料—語りものと唄いもの— (39. 6. 1~13)
70. 蒙古学のすゝめ (39. 6. 15~27, 田中市郎衛門)
71. 評判記・伝記類にあらわれた福沢先生* —明治初期資料— (39. 6. 29~7. 11)
72. 隅田川両岸一覧 (39. 7. 13~25)
73. 小山内薰胸像除幕式記念書展 (39. 7. 13~9. 12)
74. 日本の貨幣 (39. 9. 14~26)
75. イスラム細密画に現われた中世の自動機械 (39. 9. 28~10. 10, 前島信次)
76. オリンピック (39. 10. 12~24)
77. サー・オーレル・スタインの業績 (39. 10. 26~11. 7)
78. 慶應の生んだ詩人ヨネ野口—その2— (39. 11. 9~21)
79. 熱海 (39. 11. 23~12. 5)
80. 明治初期の簿記翻訳者 宇佐川秀次郎 (39. 12. 7~23, 西川孝次郎)
81. 福沢先生第2回渡米* (40. 1. 11~23)
82. 奥井復太郎教授の著作 (40. 2~3)
83. 創生期の慶應義塾* (40. 4. 26~5. 8)

84. T・S・エリオットを偲ぶ
(40.5.10~22, 岩崎良三)
85. 蘭学事始 百五十年を記念して*
(40.5.24~6.5)
86. W・B・イエーツ生誕百年を記念して
(40.6.8~19, 岩崎良三)
87. 百姓一揆 (40.6.21~7.3)
88. 船祭 (40.7.12~24)
89. 福沢研究のために* (40.8.17~9.14)
90. 古代エジプトの美術 (40.9.13~25)
91. 合巻本—徳川末期の小説一
(40.9.27~10.9)
92. ダンテー生誕700年に因んで—
(40.10.11~23)
93. 描かれた神曲
(40.10.25~11.6, 岩崎良三)
94. 日本の稻 (40.11.15~27)
95. 舞楽 (41.1.11~22)
96. W・B・イエーツをめぐって
(41.1.24~2.5, 岩崎良三)
97. 福沢先生と時事新報* (41.4.18~5.2)
98. 故小泉信三名誉教授の著作 (41.6.6~19)
99. 近代ヨーロッパの造形美術
(41.6.27~7.9)
100. 故横山松三郎教授を偲び
(41.10.24~11.5)
101. 塾生の同人雑誌* (42.1.16~28)
102. 旅, ヨーロッパー渡欧者のために—
(42.1.30~2.13)
103. 学問のすゝめ* (42.4.11~22)
104. レオナルド・ダヴィンチ (42.5.8~20)
105. 博覧会—明治初期・中期一
(42.5.29~6.10)
106. プフィッツマイアの著作
(42.6.19~7.1)
107. 柳田国男 (42.7.10~22)
108. 吉野秀雄を憶う (42.9.1~23, 中村精)
109. 西洋の紋章 (42.10.9~21)
110. ちんちん電車 (42.10.23~11.4)
111. 慶應義塾と芝新銭座* (43.4.22~5.6)
112. 慶應義塾の歴史書* (43.1.16~27)
113. 故奥野信太郎教授を偲ぶ (43.6.17~29)
114. ロバートケネディを悼む (43.9.16~28)
115. 丸岡明君を偲ぶ (43.9.16~28)
116. ルーマニアの美術工芸 (43.10.14~26)
117. 和菓子 (43.11.4~16)
118. ゴーリキーの生誕100年を記念して
(43.11.18~30)
119. 福沢屋諭吉と丸屋善八* (44.1.13~25)
120. 篆刻 (44.1.27~2.8)
121. 横智雄・石丸重治・羽原又吉三君の遺著
(44.4.14~26)
122. ニュージーランド (44.5.6~17)
123. 蒸気機関車 (44.5.26~6.7)
124. 仏文学者としての佐藤塾長
(44.6.23~7.5)
125. ポール・A・サミュエルソン教授来塾記念小展示 (46.10.18~23, 有)
126. ロバートオーエン生誕200年記念展示
(46.12.7~18, 白井厚)
127. 文化功労者に選ばれた名誉教授 西脇順三郎君の著作 (47.1.17~29)
128. 江戸時代の名所図会 (47.4.17~28)
129. 女性解放思想の180年
(47.9.25~10.7, 白井堯子)
130. 黒岩涙香の翻訳小説 (48.6.11~23)
131. 与謝野寛生誕100年—明治6~昭和10—
(48.6.25~7.7)
132. 福沢諭吉の瘦我慢の説* (48.11.12~24)
133. アメリカの独立宣言とトマス・ジェファソンに関する資料小展示
(51.6.28~7.10, 有, 白井厚)
134. エンゲルス「反デューリング論」一空想から科学へ—公刊百年記念
(52.11.9~26, 有, 白井厚 蔦木能雄)
135. ヴォルテール, ルソー没後200年記念
(53.12.5~19, 松原秀一, 驚見洋一, 原宏)

資料 II

年次統計要覧 <昭和53年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <53年度実績及び54年度予算>

内訳 支部センター	53年度実績 <単位:円>			54年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	280,733,266	911,144	281,644,410	336,034	1,770	337,804
図書館	149,205,438	911,144	150,116,582	178,200	1,770	179,970
研究室*	131,527,828	—	131,527,828	157,834	—	157,834
(私大研究設備相当額)	(14,700,000)	—	**			
日吉情報センター	56,560,215	1,360,010	57,920,225	73,696	1,440	75,136
図書館	20,540,453	1,360,010	21,900,463	28,756	1,440	30,196
研究室*	36,019,762	—	36,019,762	44,940	—	44,940
(私大研究設備相当額)	(5,100,000)	—	**			
医学情報センター	55,133,124	1,693,260	56,826,384	69,272	1,781	71,053
"	54,652,434	1,693,260	56,345,694	69,272	1,781	71,053
指定寄付金	480,690	—	480,690			
理工学情報センター	45,950,327	909,330	46,859,657	59,070	958	60,028
"	44,751,687	909,330	45,661,017	59,070	958	60,028
指定寄付金	1,198,640	—	1,198,640			
(管理工学科寄託)	(395,910)	—	**			
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**			
合 計	438,376,932	4,873,744	443,250,676	538,072	5,949	544,021

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したもの。

本部の図書費は三田情報センター・図書館に含める。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

内訳 支部センター		單行本			製本雑誌			合計
		和	洋	計	和	洋	計	
年間受入冊数	三田情報センター	12,632	23,745	36,377	5,901	7,752	13,653	50,030
	図書館	(6,428)	(11,066)	(17,494)	(2,306)	(1,679)	(3,985)	(21,479)
	研究室	(6,204)	(12,679)	(18,883)	(3,595)	(6,073)	(9,668)	(28,551)
	日吉情報センター	7,776	4,219	11,995	1,004	1,544	2,548	14,543
	図書館	(6,069)	(1,265)	(7,334)	(791)	(7)	(798)	(8,132)
	研究室	(1,707)	(2,954)	(4,661)	(213)	(1,537)	(1,750)	(6,411)
	医学情報センター	927	648	1,575	1,137	2,406	3,543	5,118
	理工学情報センター	1,494	612	2,106	3,743	6,995	10,738	12,844
	合計	22,829	29,224	52,053	11,785	18,697	30,482	82,535
所蔵冊数(累計)	三田情報センター	421,743	352,761	774,504	102,581	80,036	182,617	957,121
	図書館	(320,517)	(212,514)	(533,031)	(57,042)	(37,606)	(94,648)	(627,679)
	研究室	(101,226)	(140,247)	(241,473)	(45,539)	(42,430)	(87,969)	(329,442)
	日吉情報センター	125,648	67,610	193,258	13,184	18,495	31,679	224,937
	図書館	(85,561)	(7,296)	(92,857)	(8,519)	(131)	(8,650)	(101,507)
	研究室	(40,087)	(60,314)	(100,401)	(4,665)	(18,364)	(23,029)	(123,430)
	医学情報センター	16,721	19,422	36,143	33,356	63,210	96,566	132,709
	理工学情報センター	22,676	12,535	35,211	26,198	60,581	86,779	121,990
	合計	586,788	452,328	1,039,116	175,319	222,322	397,641	1,436,757

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの

2) 今年度より三田情報センター・研究室に図書館・情報学科の製本雑誌を含める。

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物: タイトル数>

種別 支部センター	カ レ ン ト			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	4,114	2,159	6,273	4,780	1,837	6,617	12,890
図書館	(1,590)	(593)	(2,183)	(2,966)	(1,002)	(3,968)	(6,151)
研究室	(2,524)	(1,566)	(4,090)	(1,814)	(835)	(2,649)	(6,739)
日吉情報センター	510	447	957	176	403	579	1,536
図書館	(367)	(12)	(379)	(95)	(3)	(98)	(477)
研究室	(143)	(435)	(578)	(81)	(400)	(481)	(1,059)
医学情報センター	1,014	1,105	2,119	623	966	1,589	3,708
理工学情報センター	952	1,044	1,996	1,205	1,899	3,104	5,100
合 計	6,590	4,755	11,345	6,784	5,105	11,889	23,234

注) 今年度より、三田情報センター・研究室に図書館・情報学科を含める。

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	(計)	一般図書	貴重書	
三田情報センター	10,711	56,241	66,952	—	803	1.05
図書館	(6,535)	(53,382)	(59,917)	73,356	803	1.04
研究室	(4,176)	(2,859)	(7,035)	*	—	1.08
日吉情報センター	2,733	35,648	38,381	*	—	1.09
図書館	(1,069)	(35,648)	(36,717)	*	—	1.11
研究室	(1,664)	—	(1,664)	*	—	0.87
医学情報センター	—	—	32,956	*	—	1.11
理工学情報センター	—	—	17,202	*	—	1.25

* 開架のため実数不明

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 支部センター	依頼をうけた(貸)			依頼した(借)			合計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田情報センター	559	3	562	284	171	455	1,017
日吉情報センター	57	0	57	39	0	39	96
医学情報センター	11,696	330	12,026	2,579	130	2,709	14,735
理工学情報センター	24,799	0	24,799	1,197	134	1,331	26,130
合 計	37,111	333	37,444	4,099	435	4,534	41,978

III-3 利用統計 <複写サービス>

内訳 支部センター	種別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	M F	44	7,567	12	1,109	56	8,676
	ゼロックス	17,432	391,835	999	33,166	18,431	425,001
	リコピー	277	55,839	—	—	277	55,839
	オフセット	292	222,341	—	—	292	222,341
	P P C	—	—	—	—	—	379,568
日吉情報センター	ゼロックス	7,082	52,550	—	—	7,082	52,550
	P P C	—	—	—	—	—	140,798
	電子リコピー	57	3,081	57	1,017	114	4,098
医学情報センター	M F	—	—	—	—	—	5,262
	ゼロックス	50,888	440,041	30,107	189,686	80,995	629,727
理工学情報センター	ゼロックス	19,902	288,635	24,799	244,466	44,701	533,101

注) P P Cはコイン方式のため内訳は不明

編集後記

「新図書館は今の図書館の増・改築にあるのではなく、新しく建てられるもので、その際、今迄の図書館は新図書館と関連して機能を発揮させるよう考える。新図書館は従来、ややともすれば研究・調査及び教育機能に効果的に結びつかない点があったのを是正し、一施設内において両機能が有効的に発揮されうるよう考える。蔵書数は将来25年を見越して200万冊、利用対象数は教員1,000、学生15,000、敷地は850坪、該当敷地内に約6,000延坪の建設が可能である……」

以上は昭和34年4月にまとめられた三田の新図書館建設計画の要旨で、「慶應義塾図書館史」P.245の一節から抜粋したものです。この計画は「図書館の建設には研究者、利用者の要求の調査や、学校の教育方法に見合った建て方の研究など、少くとも10年の歳月を要する。僅かな検討で好しとすべきではない（同書P.246）」というALAのダルトン国際部長の助言によって、残念ながら陽の目を見ずに終りました。

爾来20年、幾多の調査、研究を経て関係者の永年の夢がようやく実現しようとしています。昭和

56年10月に完成する新図書館は、規模において20年前の計画を下回るもの、理念においてこれをそのまま継承しており、中味は20年の間に蓄積・驗証されたデータに基づいて充分な検討が加えられております。その意味で、この20年は無為のうちに過ぎ去ってしまった時間ではなかった、といつてよいでしょう。

設計を担当される楳文彦氏は、我が国屈指の建築家として、その作品に対する評価は内外においてすでに確立されております（Space Design: SD, 79年6月号に楳文彦氏の特集が組まれ、作品が詳しく紹介されている）。

今の図書館をこれまで70年も使ってきたことを思うと、今度建つ図書館は、あるいはそれ以上の永きにわたって使うことになるかもしれません。そんな、いわば昭和50年代の義塾を後世に伝えるモニュメントともいるべき図書館の設計者に楳氏のような建築家が得られたことを私達関係者は大きな喜びとしなければなりません。

本号は新図書館計画を紹介するため、普通号よりも紙数を3分の1ほど増やしました。この計画に対するご意見・ご要望等をお寄せ下さい（中島）。

編集委員 * 情報センター本部 渋川雅俊 中島紘一 * 三田情報センター 酒井明夫 * 日吉
情報センター 関 洋 * 医学情報センター 並木和子 * 理工学情報センター 池田久子 *